



第9回ESD大賞 受賞校実践集

主 催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

後 援：文部科学省 / 日本ユネスコ国内委員会 / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 / 株式会社教育新聞社

はじめに

Education for Sustainable Development（ESD）は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育と言われています。

地球上の様々な課題を、自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、このESDの理念に基づく取組を積極的に実践する学校を奨励する「ESD大賞」を平成22年度に創設いたしました。

本事業は、全国のESDの優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。

9回目となる今年は、全国の小・中・高等学校42校よりご応募をいただきました。

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではございましたが、第9回ESD大賞として、ここに受賞校を発表し、その実践をまとめさせていただきました。

なお第9回ESD大賞は、カシオ計算機株式会社様よりご協力をいただきました。

本冊子が少しでもESD実践の参考・発展へつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

目 次

◆はじめに	1
◆審査にあたって	3
◆講評	4
◆文部科学大臣賞	
宮城県気仙沼高等学校	5
◆ユネスコスクール最優秀賞	
宮城県多賀城高等学校	10
◆小学校賞	
徳島県上板町立高志小学校	15
◆中学校賞	
大阪府寝屋川市立第十中学校	20
◆高等学校賞	
和歌山県立田辺高等学校	25
◆ベスト・アクティビティ賞	
三重中学校・高等学校	30
◆スタートアップ賞	
神奈川県横浜市立日枝小学校	35

【審査にあたって】

第9回ESD大賞の審査にあたっては、ESDの目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うこと」に基づき、審査を行いました。

加えて、

- ① ESDの目標を実現するための教育活動を組織的・計画的に実践し、その成果を読み取ることができる。
- ② ESDについての指導内容・方法等に工夫改善され、新しい提言が行われている。
などの観点も重視されています。

また昨年度に引き続き、ESDのより一層の普及を図るため、「ベスト・アクティビティ賞」と「スタートアップ賞」の2賞を設定しました。ベスト・アクティビティ賞は学校や地域の特性を生かしたオリジナリティのある活動、他校にも生かせるアイデアに富んだ取組を行う学校を表彰するものです。また、スタートアップ賞はユネスコスクールに加盟して3年未満で優れた実践を行っている学校を表彰します。

なお、賞から外れた学校にも優れた取組が多くありました。各学校におきましては今後一層精進され、ESDの発展・充実に向けた取組となることを期待しています。

文部科学大臣賞 … 宮城県気仙沼高等学校

地域と連携した探求学習、グローバルな視点による問題解決型の国際理解学習、学びを行動につなげる地域と連携した学習活動等に取り組んでいます。持続可能な社会を創造する志と実践力を兼ね備えた人材育成のためのカリキュラム開発並びにその実践等に学校を挙げて組織的な取組が高く評価されました。今後は、カリキュラムのPDCAによってESDへの取組の改善・充実を図るとともに国内外のユネスコスクールとの連携の促進に努めるとのことです。

ユネスコスクール最優秀賞 … 宮城県多賀城高等学校

ESDを視点とした科目「災害科学科」を設定し、①大災害で最も大きな被害を受けた宮城県だからこそこできる教育の展開、②大災害の教訓を次世代に伝承し将来の災害対応に活用、③将来発生する災害時に社会の様々な分野で役割を果たせる人材の育成、の三つを柱として学際的・教科横断的、継続的な学習活動のためのプログラムを開発し、自立心、判断力、責任感を身に付ける生徒の育成に成果をあげています。

小学校賞 … 徳島県上板町立高志小学校

地産地消、食育を通して地域の産業の理解と持続可能な地域づくりを目指し、地域の農業、水産業や伝統文化について体験を伴う教育活動の充実にも努め、持続可能な街づくりに貢献できる児童の育成に成果をあげています。

中学校賞 … 大阪府寝屋川市立第十中学校

総合的な学習の時間を活用してESDに取り組み、「多面的・総合的に考える力」、「他者と協力する力」、「進んで参加する態度」の育成を図る教育活動に努め、生徒は地域の一員としての自覚が育まれ持続可能な社会の形成者として、自分は何ができるかを深く考え、自主的にESDの活動に関わるようになりました。

高等学校賞 … 和歌山県立田辺高等学校

郷土への愛着と誇りを高め、異なる文化、価値観をもつ集団の中で認められる日本人としてのアイデンティティを確立し、持続可能な社会づくりに取り組む態度の育成をねらいとして総合的な学習の時間を核として教科指導、課外活動を活用し、外国人の多い街としての特性を生かし多文化共生社会の実現に取り組んでいます。

ベスト・アクティビティ賞 … 三重中学校・高等学校

郷土が生んだ偉人松浦武四郎の生き方を通して多様な人々が共生できる社会や持続可能な産業の在り方を考える教育活動に取り組んでいます。松浦武四郎の業績を学ぶ中で持続可能な産業の在り方を探究し、その学習成果を松阪市が主催する「武四郎フォーラムin松阪」で公表しました。

スタートアップ賞 … 神奈川県横浜市立日枝小学校

ユネスコスクールへの申請を検討中ですが、ESDの視点にたって地域の環境問題を教育課程に位置付けています。児童が生活する地域を流れる川に関心を持ち、自分たちの生活も川の生き物も豊かにするためには何を、どうすればいいのか、地域の方々とともに考え、行動していく教育活動の中で、児童は、よりよい環境とは何かについて考え、行動できるようになりました。

宮城県気仙沼高等学校
主幹教諭 白幡 充

グローバルな視点を持って地域社会の創造に貢献する志と実践力を兼ね備えた人材育成 ～実感を伴い、行動につなげるESD計画の開発を目指して～

1 はじめに

本校は、平成30年4月に（旧）気仙沼高校、気仙沼西高校が統合し、気仙沼高校としてスタートを切った。統合前、両校ともに平成20年度にユネスコスクールとして認定され、気仙沼高校は環境、国際理解、気仙沼西高校は福祉を中心に特色あるESDに取り組んできたが、ESDに関わる生徒は、主に部活動や委員会を中心とする限られた生徒であった。東日本大震災からの復興期にありながら、人口減少や少子高齢化などの課題を抱えている気仙沼市において、多方面から街づくりを考えることができる若者の育成は急務であり、統合校では全校体制で全生徒が「持続可能な社会づくりの担い手」としての資質・能力を身につけて卒業できるようなESD計画を作成し、統合時3年生となる生徒が入学する平成28年度より実践してきた。

気仙沼地域は、ESDに基づくユネスコスクール活動に地域をあげて取り組み、環境教育や防災教育の面で世界に発信を続けてきた。気仙沼市が平成28年1月に策定した「教育大綱」の基本理念では「自立し創造的に生きていく力、郷土に貢献し、世界で活躍するためのグローバルな視点」を、基本方針では「気仙沼ならではの資源と環境を生かした学習機会の創出」をあげている。基本目標の第1「学ぶ力と自立する力」では、「海洋教育、伝統文化の尊重と国際理解を育む教育等の推進」「幼保小中高の間及び社会への接続を重視した教育」「時代の要請に応えた教育の推進」をあげるなど、本校が新しく取り組もうとしているESDの目的や内容との共通性が高いことから、本校ESDの活動成果が地域としての一貫性ある人材育成につながることを忘れずに、本校独自の安定的なESD活動を目指し、更なる充実を図りたい。

2 実践内容

気仙沼市内は全小中学校がユネスコスクールである。本校での学びが「地域と連携したESD」の最終段階となることを意識し、「探究型学習」「国際理解学習」「地域と連携した学習」を軸としてグローバルリテラシー（以下GL）を育成し、自らの進路を探求的に学習する「志教育」へと結びつけることで、持続可能な社会を創造する志と実践力を兼ね備えた人材を育成するカリキュラム開発に取り組んでいる。

(1)探究型学習

学校設定科目を中心とした探究型学習では、「必要性・実効性・主体性」と「SDGsの17の目標との関連性」を意識し、地域課題研究から世界課題研究へと発展させ、実感（自分事とする意識）を伴った研究を進めながらGL（思考力、コミュニケーション力、多様性・協働性・行動力）の育成を目指している。

①地域社会研究（1学年全員）

海を素材とした課題解決型学習であり、水曜日6校時に学校設定科目として配置し、総合的な学習の時間（水曜日7校時）や土曜授業を活用し、全61時間（平成29年度）実施した。研究領域は「海と産業」「海と防災」「海と人間」「海の文化」「三陸の自然」の5領域とし、研究したい領域を1つ選択し、同じ領域を選択した生徒で中テーマに分かれ、グルーグを決定。5月からスタートし、1月の最終発表会にはフィールドワーク（以下FW）先、小中高の教員、地元NPO法人、県・市議会議員、学校評議員、保護者などを招きポスターセッション形式で研究成果を発表した。

月	地域社会研究（1学年）年間計画
5月	ガイダンス 地域理解講座
6月	テクニカル講座 防災講演会 防災ワークショップ
7月	領域とテーマを知る
8月	課題図書レポート 研究計画書完成
9月	グループ研究（～1月）
10月	FWⅠ（市役所・市内企業など）
11月	中間発表会
12月	FWⅡ（県内大学）
1月	学年発表会
2月	全国海洋サミット 若狭高校発表会
3月	論文作成 総合学習発表会 東北SGH課題研究発表会

【地域社会研究5領域と中テーマ】

領域		中テーマ
海を活かす	海と産業	海洋資源、観光業、商業・商店街、交通
	海と人間	人口・過疎、教育・スポーツ、保健・医療・福祉、コミュニティ
海でつながる	海の文化	伝統文化、衣食住、地理・歴史、国際化
	三陸の自然	環境、エネルギー、三陸の海、地形・地質
海と生きる	海と防災	地震・津波、震災の記録・伝承、防災教育、復旧・復興、災害医療、減災、まちづくり、心のケア

②課題研究Ⅰ（2学年創造類型）

火曜日6校時、金曜日7校時に学校設定科目として配置し、総合的な学習の時間（火曜日7校時）や土曜授業を活用し、全95時間（平成29年度）実施した。地元の自然に触れ合うFWⅠやクリティカルシンキング育成の授業を経て、個人でテーマを設定。SDGsの項目ごとにゼミを作り担当教員を8名配置した。平成30年度の台湾研修（9月）には12名が参加。講演会やスカイプ交流等の事前研修を実施し、現地では成功大学、国立台南高級海事水産職業学校を訪問し、研究発表や台南市内でFWを行った。

月	課題研究Ⅰ（2学年創造）年間計画
4月	ガイダンス 1年次の振り返り
5月	FWⅠ（森里海研究所）探究基礎の学習
6月	テーマ発表会
7月	FWⅡ（県内大学）
8月	研究活動
9月	講演会Ⅰ（台湾）台湾研修
10月	中間発表会
11月	講演会Ⅱ（研究手法）
12月	FWⅢ（各自設定）全国SGHフォーラム 講演会Ⅲ（市内企業・技能実習生交流）
1月	学年発表会
2月	論文作成
3月	総合学習発表会

③課題研究Ⅱ（3学年創造類型）

木曜日6校時に学校設定科目として配置し、総合的な学習の時間（木曜日7校時）や土曜授業を活用して展開。課題研究Ⅰの内容を深めながら、最終的には英語での発表・論文作成を目標とし、8名の担当教員（うち3名英語科）を配置した。

月	課題研究Ⅱ（3学年創造）年間計画
4月	2年次の振り返り 論文修正
5月	英語論文作成 エリザベスタウン大学との交流
6月	コンテスト応募準備
7月	コンテスト応募
8月	コンテスト応募 講演会Ⅰ
9月	英語ポスター作成
10月	最終発表会
11月	論文内容修正
12月	英語論文作成
1月	英語論文完成

④ミニ課題研究（2学年人文・理数類型）

志教育（後述）において、大学での学びや将来のビジョンを描くきっかけをつかむことをねらいとして実施している。研究分野は芸術、経営、文化・地歴・語学、理学、法律・政治、人間科学、教育、農業・水産、建築・都市開発、健康心理、家政・生活、医療、工学など多岐に及んだ。5月から10月までの短期間の実施であったが、1年次の地域社会研究の経験が活かされ、テーマ設定、研究活動、発表準備、発表までの流れはとてもスムーズであり、研究内容も充実していた。

(2)国際理解学習

気仙沼市では漁業、建設業を中心に技能実習生などの外国人登録者数は地方都市としては多い。この利点を活かすために市の小さな国際大使館との連携を充実させ市内在住外国人による国際理解セミナーや防災フォーラム、技能実習生交流会を実施した。その他、C-cube活動、スカイプ交流、海外研修、APU（立命館アジア太平洋大学）研修などを通して、グローバルな視点で考える資質と英語運用能力の育成に取り組んでいる。

①国際理解セミナー

気仙沼市内在住の外国人には、これまで高校生と交流する機会はあまりなかった。そこで、気仙沼市の小さな国際大使館と連携し、市内在住のアメリカ・ロシア・中国・フィリピン・グアテマラの方を招き、異文化理解と研究に必要な情報収集の場として設定した。

②防災フォーラム

総合学習発表会（H30.3）の第2部で防災フォーラムを実施。「すべての人が気仙沼で安全に暮らすためには」をテーマにパネルディスカッションを行った。コーディネーターは本校OBである東北大学災害科学国際研究所教授の川島秀一氏、パネリストは市内在住の外国人（アメリカ・韓国・中国出身の3名）、気仙沼市危機管理課職員、本校生活防災委員が務め、最後に東北大学同研究所の准教授 佐藤翔輔氏から講評をいただいた。



国際理解セミナー



防災フォーラム

③C-Cube活動

Career Course、Cross-culture Course、Creation Courseの3コースに英語科教員を割り振り、昼休み・放課後等の時間を活用し、英語に関する様々な活動に取り組み、英語4技能の育成を行った。

Career Course

主に英語検定合格を目指し、1次試験対策課外、2次試験対策面接指導を行うコース。

Creation Course

校内英語コンテストの運営や海外研修への参加を希望する生徒を対象にした研修を行うコース。

Cross-culture Course

平成28年度からの異文化理解講座（Cross-cultural Seminar、以下CS講座）、英会話教室、Skype交流に加えて海外の学校との壁新聞交換や、日本語教授の活動を行うコース。

【壁新聞交流先】

月	相手国	学校
6月	フランス	コリッジレスコリバート中学校
7月	韓国	ドンブ小学校
1月	ラオス	サバナケット子ども文化センター



フランスに送った新聞

韓国からの壁新聞

【Skype交流先】

Yale University、Horace Mann 高校、Pingry高校、Duke University

④海外研修

NPO法人の支援による短期海外研修などを積極的に活用する生徒が増えている。校内英語コンテスト第2部には帰国後の研修報告会を組み込んだ。また、Express yourself、ソフトバンクTOMODACHIサマー、トビタテ！留学ジャパンの3つの海外研修に参加した生徒が、次期参加を考えている生徒を対象に自主的に説明会を開催した。入学したばかりの1年生には海外研修のイメージを掴む良い機会となり、海外研修に参加したいと思う生徒の増加につながっている。



海外研修報告会



生徒企画海外研修説明会

⑤APU研修

英語のプレゼンテーション能力の向上をねらいとして、3月下旬に大分県にある立命館アジア太平洋大学での研修を行っている。2泊3日の短い日数ではあるが、マンツーマン体制で大学の留学生からアドバイスを受け、参加した生徒は、原稿に頼らず、表現力豊かなプレゼンテーションができるまでに成長している。

(3)地域と連携した学習

行動へのきっかけ、地域発展をねらいとして「探究型学習」「国際理解学習」「防災教育」に関して地域の関係団体との連携を進めている。

①地域連携

課題研究におけるFWでは市役所や地元の企業・NPO法人等を訪問し、地域の現状や課題を学べる体制を整えた。国際理解学習における連携は(2)①国際理解セミナーで記したとおりである。また、生徒の地域貢献意欲を実践という形につなげられるよう、日頃から高校生の活動支援しているNPO法人「底上げ」成宮崇史氏、一般社団法人「まるオフィス」加藤拓馬氏を本校独自でFWアドバイザーとして委嘱し、毎月「FWアドバイザー相談会」を開催している。この他、小中学生との生徒間交流を行うなど、ESDの学びを実践へと繋げるための連携体制を整えた。

②防災教育

東日本大震災で得た社会貢献意欲を学びの動機付けとし、自分の生き方に活かすことをねらいとして、消防署や自衛隊と連携した生徒主体の防災訓練や県外高校との震災交流、防災を研究している生徒による「防災マニュアル」作成、宮城県教育委員会が作成した防災の副読本を活用した教科授業、防災フォーラムの開催（前記）などに取り組んでいる。

(4)志教育

社会貢献意欲に裏付けられた進路設計能力を育むことをねらいとした、マスタープラン「Kプロジェクト」を作成し、総合的な学習の時間を中心に、3年間で系統性のある志教育に取り組んでいる。

【志教育 学年ごとのテーマ及び年間計画】

1学年 社会の一員として どう生きるかを考える

2学年 「志望」進路を思い描く

3学年 「強い志」を持って前進する

月	志教育 年間計画
4月	ガイダンス
5月	進路ガイダンス（3年） 小論文講演会（3年） ミニ課題研究（2年人・理）
6月	職業研究（1年） 類型選択ガイダンス（1・2年）
7月	類型選択ガイダンス（2年）
8月	学問探究（1年）
9月	進路講話（1年）
10月	キャリアセミナー（1年） 夢ナビ（2年） ミニ課題研究発表会Ⅰ（2年） 進路ガイダンス（2年）
11月	ミニ課題研究発表会Ⅱ
12月	修学旅行（2年） 志教育実践発表会
1月	志望理由書（2年） 学びの報告書（3年） 学びの設計図（3年）
2月	学びの中間報告書（2年） 10年後の私（1年）
3月	小論文講演会（1・2年）

3 学びを活かした実践例（H28~H30）

(1)海外や地域に向けた生徒の活動

①日本語を教えよう（H29.5~12）

Cross-culture Courseの中で11名の生徒が日本語を学びたいというアメリカとラオスの5名の学習者に、日本語を学ぶ教材を作成し、インターネットを用いて添削を行った。

②大島カブを利用した料理教室（H29.10）

過酷な環境でも安定して収穫できる奇跡の黄色いカブを地域の活性化に役立てることを研究してきた生徒が、自分で考えた料理を教えるイベントを開催した。この研究は、気仙沼・南三陸地域の「初夢ビジネスプランコンテスト」において16件の応募で唯一の高校生であったが最優秀賞に輝いた。

③防災ワークショップ（H30.1）

「防災に関する関心を高める方法」について研究した生徒が、市内のイベント会場を借りて、市民や市内在住外国人と一緒に非常用持ち出し袋の中身を考えるワークショップを開催した。

④「地産地消フェスティバル」（H30.4）

地方創生イノベーションスクール2030に参加した8名の生徒を中心に、地方創生のための活動を開催した。初動メンバーに、地方創生に関する研究を行った同級生と他校生を加え、地元企業やNPOの支援を受けながら企画・資金集め・運営をすべて高校生が行った。

⑤公民館を利用した子どもの遊び場づくり（H30.8）

「子どもの居場所」について研究した生徒が中心となり実行委員会を立ち上げ、高校生スタッフを募集。公民館を借りて「笑顔っ子フェスティバル」を開催した。

⑥気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード参加

高校生が、地域課題を解決するためのプロジェクトを大人の協力者とともに作成・実行する気仙沼市主催のイベント。平成29年度は本校から6名が参加、今年度は20名を超える生徒が参加し、地域活性につながるマイプランを実行した。



地産地消フェスタ



笑顔っ子フェスティバル

(2)研究成果を活かした小中学校との交流活動

①海洋教育子どもサミットへの参加（H28~H30）

気仙沼市や岩手県洋野町で行われている、海洋教育をESDの軸として取り組んでいる小中高が一堂に会するサミット。第1回（H28）開催から本校生が研究成果の発表、サミットの司会や小中学校の話し合いのファシリテーターとして参加している。

②気仙沼市防災フォーラムでの発表（H30.1）

気仙沼市と市教育委員会が主催、東北大学災害科学国際研究所と気仙沼ESD/RCE推進委員会が共催しているフォーラム。防災について研究している生徒が研究成果を発表した。

③条南中学校でのポスター制作支援（H30.10）

昨年度の「地域社会研究」で優秀賞・優良賞となった10グループのメンバーが、本校から一番近い中学校である条南中学校を訪れ、文化祭でポスター発表をする中学生に対して発表のデモンストレーションとポスター制作の支援を行った。



海洋教育こどもサミット



ポスター作成支援

(3)本校研修会への小中高教員の参加

気仙沼市全体の学校におけるESDの発展をねらいとして、市内小中学校と管内高校に本校主催の課題研究指導力向上研修会や英語教育研修会、授業研究会の案内を配布し、共に学ぶ機会を設定した。

4 成果と課題

(1)成果

- ①探究型学習を進める中で、地域課題を自分事として捉えていなかったことに気づき、主体性をもって課題解決に取り組む生徒が増えてきている。また、市内の外国人と関わる機会を増やすことで、気仙沼市が多く外国人に支えられていることが実感でき、異文化理解、多様性などがこれからの街づくりに必要なことであると感じる生徒も増えている。
- ②答えのない問題に対して、小さなPDCAサイクルからスタートし、それを次の取組に生かそうとする生徒が増えている。特に、研究成果を実践する行動力は、上級生がモデルケースとなり、後輩に良い刺激を与えている。また、研究内容を自らの進路選択に強みとして生かす生徒も増えてきている。
- ③小中学校との連携にも多くの生徒が積極的に参加するようになり、そのような高校生の姿が多く関係者に対して気仙沼におけるESDの小中高の発展性を可視化することに繋がった。
- ④学校としての教育活動の進展を感じている。第1に前向きな統合が実現できていること、第2に探究型学習の充実と主体的学習サイクル確立を進められていること、第3に小中高連携をはじめとする地域協働による「地域に開かれた教育課程」を具体化しつつあることの3点である。

(2)課題及び今後の取組

- ①各事業において、グランドデザインとそれに基づく第1次実践が完了した段階であり、今後、事業ごとのPDCAサイクルを回すとともにESD全体の大きなサイクルを回していく。
- ②目指す資質能力の育成状況の客観的指標の開発を進める。（現行のGL評価ルーブリック改善）
- ③国内外のユネスコスクールとの連携を図り、未来社会の創造に向けた共同実践を進めたい。

ユネスコスクール最優秀賞

宮城県多賀城高等学校
教諭 菅原 淳史

持続可能な未来の創造者を育成する防災・減災学習

1 はじめに

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、本校が立地する多賀城市では、死者188名及び関連死が30名を数えた。多賀城市の津波は「都市型津波」と言われ、津波の河川への遡上や幹線道路の濁流路への変容、下水道を流路とした海水の流入など複雑な様相を示した。この津波で多くの車両が流出し、湾岸の工場では設備に壊滅的な被害を受けた。



図1 震災時の多賀城市中心部

この大震災を受け、宮城県では平成23年10月に宮城県震災復興計画を策定し、防災教育の充実を復興の重点とした。さらに宮城県教育委員会では、「みやぎ学校安全教育基本指針」を策定し、平成26年2月に、大震災から学んだ教訓を確実に次世代に伝承するとともに、将来国内外で発生する災害から多くの命と暮らしを守ることができる人材を育成するために「防災系学科設置基本構想」を示した。

本校は、この基本構想に基づき「災害科学科」（1クラス40名）を平成28年度に開設し、普通科（6クラス240名）と合わせて防災・減災に関わる学習を行うこととした。

本校は、第2期教育振興基本計画に示された『被災地から発信する未来型教育モデルづくりや防災教育の促進』に基づき、全国への学習内容を発信できるパイロットスクールとしての役割を担う

ことにした。そこで、次の3つの観点を踏まえた。

- ①大震災で最も大きな被害を受けた宮城県からできる教育の展開
- ②大震災の教訓を次世代に伝承し、将来の災害対応に活用
- ③将来発生する災害時に、社会の様々な分野で役割を果たせる人材の育成

「災害科学科」では、災害に関する科学的見地を持った学習を通して、他者の命や暮らしを守ることにつなげる教育を行うこととしたが、防災学習を県内外に発信するパイロットスクールとしての役割を担うため、防災に関する基礎的な知識・技能を習得する一般的な防災教育は「普通科」・「災害科学科」両科共通で行うこととし、教育課程の編成と課外活動を含めた学習内容を検討、実践（カリキュラム・マネジメント）することにした。

防災学習では学際的な取組が必要であるとの指摘があるにも関わらず、既存の科目や特別活動の枠組みに留まることが多く、様々な分野に及ぶ横断的な学習への取組は少ない（参考「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議」など）。そこで、防災上考慮すべき事項を学際的・教科横断的（クロスカリキュラム）に、かつ継続的に学習するためのプログラム開発を行った。高等学校では中学校までの学習内容を踏まえ、教科の専門性を活かしながら多様で実践的な展開を行うこととし、特に自助や共助の観点から身の回りの生活や社会生活を防災・減災の観点から多面的に見直した内容とした。多くの人命と暮らしを将来にわたって守る上で基本となる学習内容は、ESDの考えと一致し、防災・減災を切り口として、課題を自らの問題として捉え、一人ひとりが考え、実践していく課題解決能力を身につける学習となる。こうした考えから特に、学習内容を整理し、

防災学習、自然科学学習、国際理解学習を3つの柱とした授業やボランティアを含めた課外活動を外部機関・講師を数多く活用しながら行うこととした。

防災・減災学習では自然環境と自然災害を取り上げる自然科学を基盤とすることは言うまでもない。自然科学の観点では、人間の生活環境下における短期間での自然環境の変化が災害となるが、地球創生からの歴史で見れば地球ダイナミズムのほんの一点に過ぎない。地域独自の自然環境を理解することや、災害の発生原因をまとめ、それを類似の地域に当てはめる作業（シミュレーション）は減災、備災に発災後の回復力（レジリエンス）を高める工夫も大切である。

また、防災・減災は自然科学に留まるものではなく、社会科学、人文科学の視点が欠かせない。過去の歴史に学ぶことや発災前後における法律や行政計画の整備、災害時に備える避難訓練や心理状況の理解及び発災直後の行動心理や備えを学習することは、学校教育にとどまらず、短期・長期的に地域の防災・減災力を向上させることに繋がる。

さらに、日本は災害大国である。外国に比べて台風、大雨、大雪、洪水、土砂災害、地震、津波、火山噴火などの自然災害が発生しやすい国土である。日本の国土面積は全世界の0.28%でしかないが、全世界で起こったマグニチュード6以上の地震の20.5%が日本で起こり、全世界の活火山の7.0%が日本にある。これまでの幾多の被災経験や教訓により培った防災・減災に関する知識や技術を活用し、世界の災害被害の軽減に向けた国際防災協力を積極的に進めることは、持続可能な社会形成の面で国際貢献の重要分野となる。

加えて、ボランティア活動は自分自身の考えによって始める活動（自主性・主体性）である。社会のさまざまな課題を発見し改善していくために一人ひとりが考え、人びとと協力しながら力を合わせて行動すること（社会性・連帯性）であり、目の前の課題に対して、解決策や改善策を従来の考え方にとらわれることなく、自由な発想やアイデアを大切にしながら方法や仕組みを考え、創り出していく活動（創造性・開拓性・先駆性）である。これらは「持続可能なよりよい社会を創る」活動の基盤となる。

「持続可能な社会づくり」にかかる課題を見出し、それらを解決するために「必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して「持続可能な社会の形成者」としてのリーダー的な資質を養う

防災学習	通学防災マップ、津波波高標識設置、ワークショップ、DIG、HUG…
自然科学学習	つくば研修、浦戸実習、栗駒実習、JAXA 特別授業…
国際理解学習	被災地案内国際交流、JICA 連携授業、海外高校・大学交流…
ボランティア活動	合同避難訓練、復興コンサート、地域防災キャンプ、被災地募金…

特徴的な学習

- ・探究活動、課題研究の重視
- ・フィールドワークや実習の重視
- ・文理融合科目の開設
- ・防災・減災のクロスカリキュラム

学習の方法

- ・ICTの活用（IE-School）
- ・協調学習、アクティブラーニング
- ・PBL など

育成される構成概念

多様性：自然には、恩恵と共に脅威が存在
相互性：自然、人間、社会には密接な関係
有限性：自然に対する人間の限界
公平性：恩恵も災害も地域や世代に公平
連携性：教訓を他の地域や世代につなぐ
責任性：災害時には自分の考えを持ち行動

多賀城高等学校のESDのイメージ図

2 実践内容

(1)合科科目の設定とクロスカリキュラムの実施

災害科学科開設にあたり、防災・減災・安全、環境などの観点から社会生活との繋がりを理解し、自己や他者の安全を考えて主体的に行動する能力を育む教科「くらしと安全A」と、生死を分ける情報収集と発信の内容を理解し、技能を活用する能力を育むことを目指す教科「情報と災害」の2科目を「災害科学科」だけでなく「普通科」においても実施する基幹科目として位置づけた。

また、災害科学科では防災・減災を学習素材とした合科的な専門科目を設定し、普通科では普通教科においてクロスカリキュラムを実施した。

①「くらしと安全A」（4単位）

「家庭基礎」及び「保健」の基礎的事項を学ぶとともに、防災や災害に関する基礎的な知識、技能を学習する合科的な科目。心身ともに安全な暮らしをおくるために、家族・福祉、衣食住、消費生活、健康と生活環境を適切に管理し、心身の健康や環境、傷害防止などの基礎的・基本的な知識や技術を、防災・減災の観点から考え習得させるとともに、主体的に社会と関わる能力と態度を育成する科目とした。



図2 くらしと安全特別授業

②「情報と災害」（2単位）

情報及び情報技術を活用するための基礎的な知識と技能を習得させ、災害時に生死を分けた正確な情報の収集とその処理及び発信の必要性を含め、防災・減災のために有用な情報処理技術について科学的な見方と考え、その役割や影響を理解し、主体的に社会に関わる能力と態度を育成する科目として設定した。

(2)代表的な防災・減災学習

①通学防災マップ

津波浸水域が示されたマップ2枚に通学路を書き込み、学校と家庭それぞれで保管し、災害時に通信が途絶えたときの帰宅や送迎の可否に用いる。



図3 通学防災マップの作成

②津波波高標識設置活動

多賀城市内に達した津波波高を、住宅の壁や塀に残っている痕跡から測定し、その調査結果を最寄りの電柱や電信柱に表示する活動。



図4 波高標識設置

通学路の安全確保、通行人への啓発、震災の伝承など様々な目的をもつ。

また、被害の大きかった地域から設置標識に沿い、貞観地震でも津波が来なかったと百人一首で詠まれている末の松山まで案内する「まち歩き」を行う。

③防災ワークショップ

発災前、直後の行動、被災後の生活などを想定した様々なワークショップを大学教授・学生、建設コンサルタント社員などをファシリテーターとしてワークショップを行う。

④DIG、HUG

様々な災害について、異なる季節、時間、場所を想定した図上訓練（DIG）を行うことや、避難所運営の基礎（HUG）について、授業、HRや課外活動で行う。

⑤生徒間の交流、全国への発信

全国から来校する高校生や研究者等と被災地を巡る「まち歩き」や、「ワークショップ」での交流を行う。一方では全国各地での学会、フォーラムや交流会に参加して自分たちの活動を報告し、防災・減災の重要性についての意見を述べる。

(3)代表的な自然科学学習

①浦戸実習、栗駒実習

海洋研究開発機構（JAMSTEC）の研究員や東北大学の教員を講師とし、地球ダイナミズムの観点から行う野外実習。松島湾に浮かぶ浦戸諸島は津波被害を受けた島々であり、栗駒は岩手宮城内陸地震で日本最大規模の地滑りが起こった場所である。これらの場所で地形・地質分布の調査や、震災後の植生の変化、土壌採取から自然環境変化を観察し、課題研究のテーマとする。これらの野外調査にはタブレット端末やドローンを用いる。



図5 浦戸実習

②つくば研修

防災科学技術研究所（NIED）、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、産業技術総合研究所地質標本館（AIST）等を訪れ、施設見学、講義に加え防災・減災に関わる実習や実験を行う。NIEDでは液状化、共振、土砂崩れのモデル実験、JAXAでは人工衛星の画像を用いたりモートセ

ンシングの実習、AISTでは地形・地質調査の実際についての講義などを受ける。これらの実習経験を活かし、課題研究に取り組む。

(4)国際理解学習

①被災地案内国際交流

海外から被災地を訪れる方々に、震災時の様子や復興の様子を共に現場に赴きながら伝え、津波波高標識を設置した地域を案内する「まち歩き」などを行う。単に震災の様子を伝えるだけではなく、宮城県の魅力を伝えるために松島なども案内し、海外からの旅行者や留学生に生徒自らの言葉で、実際の場所を見てもらいながらガイドする。この活動は、「災害」という世界のどこでも起こりうる言葉をキーワードとした国際理解を深める絶好の機会となっている。ドイツやシカゴの高校生を、ホームステイで受け入れ文化・スポーツ交流を含めた幅広い交流も行っている。

②JICA連携事業

タンザニアに赴任していた元青年海外協力隊員による講義や、JICA東北主催のフォーラムにおけるワークショップへ参加、アジアやアフリカからの研修員を受け入れた特別授業や情報交換を行う。



図6 被災地案内（松島）

③海外高校生や大学、研究者との交流

ハワイやインドネシアの高校生とのインターネットを用いた交流、環太平洋大学協会の学生やASEAN諸国の留学生との防災に関する意見交換やワークショップ、ハワイ大学の学生や教員と防災や環境を題材としたワークショップな

どを行う。

(5)ボランティア活動

高校3年間を通して、ボランティア活動を35週間以上活動に対して1単位の単位認定を行う。地域からの要請に応えるほか、自らが課題を発見し、企画・実行して地域活性化を目指す（PBL型）試みも盛んになってきている。ボランティアの種類は防災、復興をはじめとして多種多様に及んでいる。

①自治体との連携

多賀城市との連携事業も数多く行っており、防災や復興のイベントの他、多賀城市合同防災訓練への参加、地区で行われる小学生・中学生対象の防災キャンプのリーダーとしての参加、市民会館における「コンサートで避難訓練」などを実施している。



図7 セービングフェス



図8 住宅大掃除

②企画型ボランティア（PBL型ボランティア）

多賀城市中央公民館からの要請による市民防災教室では「家族で防災！わくわくサバ飯体験」を企画・実行した。セービング協会からの要請を受けセービング町菖蒲田浜の海開き（海水浴場再開）を応援する試みとして、軽音楽部、家庭部、放送部がイベントの企画運営に携わった。多賀城市公営復興住宅の住民からの要望で、子どもの遊び場づくりや独居老人の大掃除援助などを行った。このような企画型の試みは地域の課題を自ら見だし、解決していくESDの求める力を育むものである。

③被災地支援募金

熊本地震、九州北部豪雨、西日本豪雨、大坂北部地震、北海道胆振東部地震等において、街頭募金を行い被災地の高校メッセージと共に直接届ける活動を行っている。

3 成果と課題

答えが一つに定まらないESDで取り組む複雑な課題解決に取り組んでいる人材を育成する上で生徒の変容を今までよりも深く広く知るためには、多様な形成的評価方法を体系的に組み合わせる必要がある。そこで、これまでのパフォーマンス評価にとどまらない多様な評価を試みている。多様な評価の一つとして、災害時の能力測定のための形成的評価の開発を、東北大学災害科学国際研究所と協力して行っているが、1年間防災・減災の学習を行った結果、「人をまとめる力」、「問題に対応する力」、「人生を意味づける力」、「生活を充実させる力」が有意に上昇する結果が得られている。



図9 国連防災世界会議

本校の活動については、「第3回国連防災世界会議」や「世界防災フォーラム」、「世界津波の日高校生サミット」でも報告している。さらに、本校が主催する「東日本大震災メモリアルday」では全国で防災・減災を学習する高校生を招待し、ワークショップやポスター発表を行い、意見交換を行っている。

今後も学校全体としてESDの視点から防災・減災学習に取り組み、新たな教育課題に挑戦し、これらの成果を発信できるパイロットスクールとしての責任を果たしていきたい。



図10 東日本メモリアルday

小 学 校 賞

徳島県上板町立高志小学校

校長 武田 國宏

SDGsへの挑戦

～エシカル消費を通しての地域活性化プロジェクト～

1 はじめに

高志小学校がある上板町は吉野川の豊かな水・肥沃な土地を活用し第一次産業を基盤にして発展してきた町である。校区には畜産・酪農・養鰻業等各種の一次産業を営む多くの農家がある。また、近年注目されているJAPAN BLUEの藍染も17世紀から伝統的に継承され、天然染料すくもの生産量は日本一を誇る。

2016年度までは総合的な学習の時間を中心に「地域について深く学び、地域を大切に作る児童の育成」をテーマに学習を展開していた。

2017年度から、教科横断的にカリキュラムをマネジメントしホールスクールアプローチでESDの実践に本格的に取り組み始めた。

本校のESDは、経済発展と働きがいのある仕事、産業・技術革新・社会基盤、格差の是正、持続可能なまちづくり、持続可能な生産と消費をテーマとしている。これらのテーマにアプローチするために、豊かな地域資源を活用し、地域での農業・水産業・伝統文化体験活動・交流活動を基盤とし、各種関係団体（各種企業・NPO・徳島新聞・徳島県庁・町学校給食センター等）と連携しSDGs12番目のターゲット「つくる責任・つかう責任」を中心に学んでいる。そして、持続可能な町づくりに貢献できる児童を育成している。

ESDの活動分野として、環境学習、国際理解学習、生物多様性を中心としている。

2 実践内容

1年生は、春から秋にかけて学校園で徳島名産の鳴門金時（さつまいも）を栽培し、収穫後には栄養教諭の指導によりスイートポテトづくりに挑戦し、地域の特産物のよさを学んだ。

秋から冬にかけては、JAの方の指導を受け「か

ぶ」を栽培した。学校園にビニルハウスをつくり、成長を興味深く観察した。収穫した「かぶ」は上板町学校給食センターにお願いし、1年生の給食に「かぶのサラダ」として提供していただき、地産地消を体験した。

どちらの実践も野菜の生長過程を興味深く観察し、調理、食べるという活動を通して食の重要性を学ぶことができた。

2年生は学校園で地域の農家の方の指導を受け、パプリカ・トマト・ナス等の野菜を栽培した。収穫した野菜は、下校時学校に車で迎えに来た保護者に販売し、とれたての新鮮な野菜の美味しさを味わってもらった。その後、野菜販売の利益等で買い物学習を行い、自分たちが栽培した夏野菜ピザをつくることに挑戦した。その際には、県内で地産地消を推進するフード・ハブ・プロジェクト株式会社の指導で徳島産の小麦粉を使い、ピザとパンをつくった。学級全体で作る喜び・食べる喜びを味わい、地産地消、フードロスゼロを学んだ。



夏野菜づくり



夏野菜収穫



夏野菜ピザづくり



夏野菜収穫

3年生は養鰻業についての学習を展開した。養鰻業は美しい、大量の水を必要とする産業である。高志地域では吉野川の豊かな水を使い日本でも有

数の養鰻業者がある。養鰻場の見学、養殖うなぎへの餌やり体験をした。その後、鰻の生態学習、吉野川の水についての学習、絶滅の危惧があるうなぎの保護、環境の保護について学習した。これらの学習を町学校給食センターが知り、9月には上板町で養殖されたうなぎを使用し、町内の全幼稚園・小学校・中学校に鰻井の給食を提供していただいた。うなぎを初めて食べた児童も多数いた。児童から「上板のうなぎは美味しい」という声が聞かれ、その日の給食の残食はゼロであった。さらに、12月には3年生児童が養鰻業者・栄養教諭の協力を得て、鰻井とそば米汁（徳島の郷土料理）の調理実習に挑戦した。この日の昼食も残食ゼロで地産地消の重要性も学ぶことができた。



うなぎ見学



うなぎ選別



鰻井給食

高志小学校PTAは10年以上前から地域の方の協力を得て資源ごみ回収に取り組みリサイクル活動を推進している。さらに、4年生から6年生の児童で構成される児童環境委員会も協力しリサイクル、リユーズを推進している。

2017年度5年生はこれらのノウハウを活用し、ユニクロの「服のチカラプロジェクト」に参加した。

5年生児童で話し合い子ども服を回収する方法を考えた。自分たちが考えたポスター、新聞の折り込みチラシを作成し、徳島新聞・町広報誌等を活用し町内住民に広報した。さらに、9月の運動会では開会式で運動会に参加している保護者、地域の方に直接呼びかけた。このようにして回収した再利用できる子ども服を、ユニクロ・国連難民高等弁務官を通じてアフリカの難民の子ども達に

送ることができた。子ども服を送った後に、世界の難民問題について話し合い、世界平和を実現するために自分たちに何ができるか考えた。そして、平和メッセージと子ども服回収のお礼状を徳島新聞の協力をいただき、折り込みチラシで町内の方に届けることができた。このようにして3R推進活動と世界の難民問題について学ぶことができた。



5年生は伝統産業である藍の六次産業に挑戦した。この活動では藍染をエシカル商品として世界に普及している地域の六次産業グループ（BUAISOU）の協力を得て行った。5月に藍の植え付け、7月には藍の収穫、こなし（藍の葉を細かく刻み乾燥させる作業）、10月には麻布のランチョンマットの縫製、11月には染めを行い藍製品が完成した。その後、藍染のよさについて探究的に学びポスターを作成した。12月にはPTAバザーで保護者や地域の方に藍製品のよさをプレゼンテーションし、自分たちが作成したランチョンマットを販売し、完売することができた。伝統文化である藍染がエシカル製品として世界に普及しつつあることを学びエシカル消費の意義を体感することができた。



6年生は「エシカルな豚肉（金時豚）」の生産・販売に取り組む農家の協力を得て、養豚体験、金時豚のよさを探究的に学び、エシカル商品を消費する事が持続可能な社会をつくることを学ぶことができた。さらに、町学校給食センター、栄養教諭の協力を得て、自分たちが世話した豚肉を使い料理実習も行い地産地消を体験した。これらの学びが契機になり、町役場・学校給食センターが地産地消を重点施策とし、町内全幼・小・中学校に「金時豚」の給食が提供されるようになっている。



5・6年生の学びについてはホームページ、SNSを活用し全国・海外に発信している。さらに、タイ、中国の小学校と作品、写真、映像での交流も行っている。藍製品についてはザンビアの医療機関にもNPOを通じて送ることができた。

3 成果と課題

(1)児童に育まれた資質能力

これらの実践を通して、子ども達は持続可能な社会の形成者として一つの回答に帰結できない事に対してチャレンジングに取り組むことが重要であるという価値観をもつことができています。さらに、今ある価値が未来をつくるのではなく、社会の課題を解決するために、教科書に書かれていない事を自分達が考え、そして実行しなければならないという考えを多くの子ども達が持つことができています。多様な人から多様に学ぶことが自分の考えを広げ、深め、新しい考えや生活に使うことができる知識や技能を身につけるためには重要な態度である。

何よりも自分が体験して、交流して学んだ事が真実であるという価値観を得たことは貴重である。課題解決は現地に行かないと分からないということを実感し、自分が住む上板町を誇りに思い、地域を大切にしようとする思いを強くしている。

【育まれたと考えられる資質能力】

- ・社会に積極的に関わろうとする態度
- ・多様な情報を収集し、整理・分析する力
- ・多様な人と積極的にコミュニケーションできる力
- ・多様な側面から思考し判断し、表現する力
- ・自分達の学びを振り返る力
- ・未来を予測し計画を立てる力
- ・人間関係を調整する力
- ＊児童のポートフォリオ、振り返りの話し合い活動を通して評価した結果より

(2)教師・保護者・地域関係者に育まれた成果

教師は社会に開かれた教育課程の創造、カリキュラムマネジメントの力を少しずつ向上させることができています。さらに、保護者や地域の方が日々の教育活動を積極的に支援してくれるようになり、開かれた学校が実現し、多くの方が日常的に学校を訪問してくれるようになった。

少子高齢化が進む校区において、地域の方が高志を誇りに思い、地域住民が元気になっている。

(3)実践を通しての課題と今後の展望

教職員・児童・地域関係者が、持続可能な社会づくりに向けて、カリキュラムの作成・実践の段階で、自分たちの学習活動の「テーマ」と「活動の具体的なゴール」を明確に持つこと、常にテーマとゴールを意識して話し合う事、実践後に振り返りを行い、カリキュラムの改善・修正を適切に行うことができるかが大きな課題である。

私たち教職員、子ども達が意欲的に学び、新しい価値を学ぶことができる、地域での質の高い体験・交流活動を継続的・積極的に取り入れる事も大きな課題である。そのために教師が新しい価値や持続可能な社会づくりをめざして活動（仕事）する地域関係者を見つけ、その方達とのネットワークをいかにして構築するかが重要である。

ESDの実践を本格的に始めて2年目である。赴任した当初の子ども達は笑顔が少なく、学習には消極的、自分を表現することにも自信のない子ども達であった。全国学力・学習状況調査において

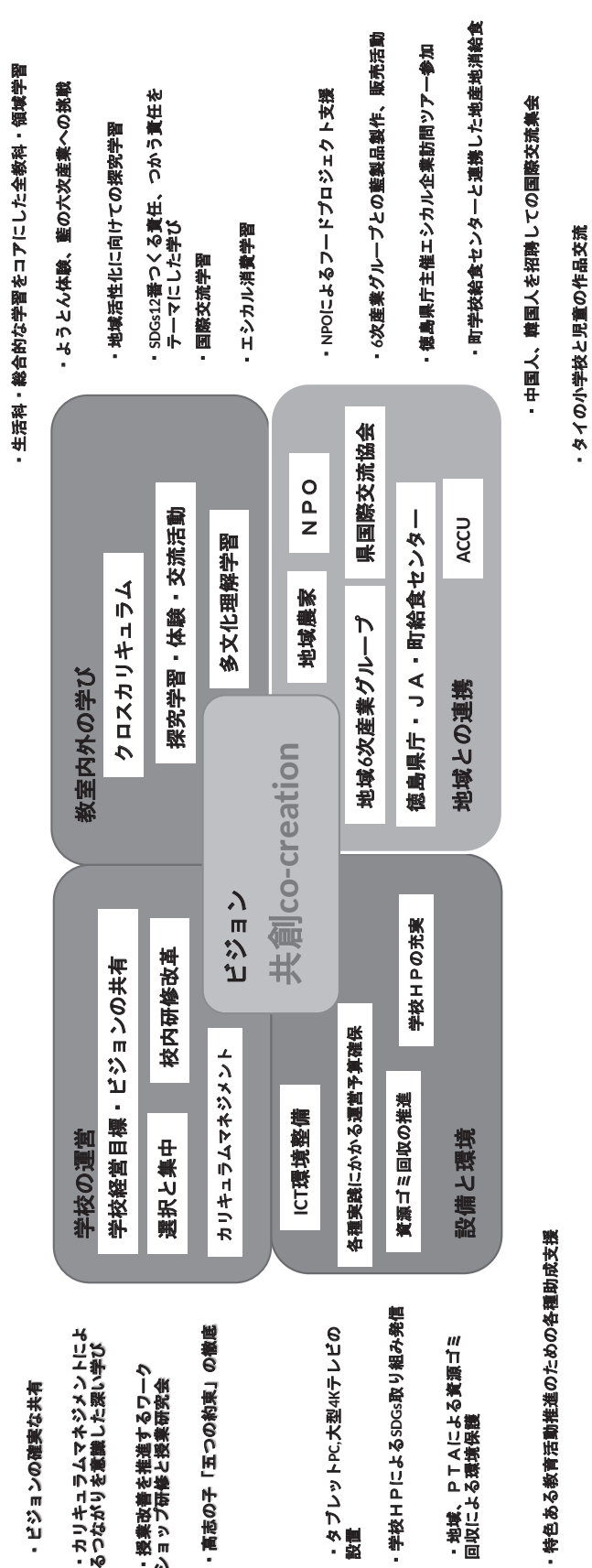
も低いスコアの子も達であった。この2年間、ESD実践のためのカリキュラムづくり、社会に開かれた教育課程を創造・実践する中で教師に笑顔と活力が蘇り、子ども達も学校大好き、笑顔いっぱいになってきている。育まれた資質・能力もたくさんある。

何よりも学校大好き、高志大好き、自分の学校はすごい学校という自負心もできつつある。今後子ども達と共に質の高い実践を展開したい。

SDGs推進プログラム

	1 学 期	2 学 期	3 学 期
1年生	つくって食べよう ・学校園でさつまいも栽培 （農家の方に学ぼう）	・さつまいものお菓子作り （給食センター栄養教諭に学ぼう） 冬野菜（カブ）を栽培しよう JAの方に学ぼう	学んだことを伝えよう ・食べることは生きること
2年生	校区探検（校区で頑張っている人と出会い、幸せを感じよう） ・校区の農家訪問（人参農家、酪農家） ・学校園で夏野菜栽培、ピザづくり （野菜名人さんに学ぼう）	・幸せギフトプロジェクト ・クリスマスプロジェクト （ケーキ職人さんに学ぼう）	学んだことを伝えよう ・幸せギフトプロジェクト ・夏野菜プロジェクト
3年生	校区探検（つくる責任を担っている人から学ぼう） ・校区の農家、養鰻業者、漬け物工場訪問 ・地産地消プロジェクト ・つくる人の工夫、願いを知り、使う責任を考えよう ・地域環境保護（水・土）の重要性を提案しよう		学んだことを伝えよう ・高志の素敵発信プログラム ・環境保護プログラム
4年生	REUSE・自然体験学習で環境保護に挑戦 ・学校園で藍の栽培・藍の刈り取り ・草木染めに挑戦 ・服のチカラプロジェクトに参加（地域の方の協力を得て子ども服を集め、世界の難民の子どもに送ろう）		学んだことを発信しよう ・環境保護プロジェクト
5年生	阿波藍（JAPAN BLUE）の6次産業に挑戦・世界に発信 ・6次体験（藍の栽培、刈り取り、こなし、寝せ込み（すくもづくり）、縫製、デザイン、染め、販売） ・探究学習（阿波藍のよさ、エシカル消費、JAPN BLUE）		学んだことを発信しよう ・JAPAN BLUE 発信プロジェクト ・地域創世プロジェクト
6年生	校区のブランド豚（金時豚）から全国にエシカル消費を発信しよう ・養豚体験（養豚場見学・えさやり・肥育学習） ・エシカル企業見学 ・養豚体験第二段 ・探究学習（金時豚リサーチ、地産地消、エシカル消費って何） ・地産地消体験（地産地消レストランでの昼食）		学んだことを発信しよう ・エシカル消費推進プロジェクト ・地域創世プロジェクト

ホールスクール・アプローチの効果を高める方策



中学校賞

大阪府寝屋川市立第十中学校
校長 佃 千春

自分を大切に ひとを大切に 未来を大切にできる生徒の育成

1 はじめに

これからの変化の激しい社会を生き抜くためにも、生徒たちは、知識及び技能を身に付け、思考力、表現力、判断力を養い、主体性をもって多様な人々と協働できる態度などを身に付けなければならない。

本校は、寝屋鉢かづき学園として三井小学校、宇谷小学校とともに9年間を見通した継続性・系統性・計画性のある小中一貫教育を進めている。校区には大規模な二つの団地群を有し、地域の高齢化率も高くなっている。生徒たちは自分たちの住む地域を「住みやすい地域である」と感じながら、全国学力学習状況調査における「地域や社会で起こっている問題に関心がある」という質問については34%と全国よりも低い状況にあった。次代を担う地域の一員としての自覚をもち、視野を広げ、仲間と協働した取組を進めることで、地域に貢献し、逞しく生きる生徒の育成をめざしたいと考えた。

新学習指導要領におけるESDとの関連についても、総則や各教科等において多岐にわたり記述が見られるようになった。また、SDGs4「質の高い教育」を中心として、SDGs17の目標をどのように意識し、教育活動に取り入れるのかについても考えていかねばならない。

ユネスコスクールとして、地域や社会とも連携しながら、学校全体で取組を進め、様々な探究活動や主体的・対話的で深い学びを通して、「自分を大切にできる心（Care）」や「他者と協働しながら（Communication）」「進んで参加する態度（Action）」を身につけることで、地域や社会に貢献し、将来にわたって持続可能な社会を生きぬく生徒の育成が可能であると考えた。

国立教育政策研究所の示すESDの視点に立った学習指導の目標は「持続可能な社会づくりに関わ

る課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」とされている。その目標を意識し、学校教育目標「深く考え 心豊かな 逞しい人」のもと、ESDの視点に立った学習指導を深める中で、「ESDで重視する能力・態度」の中から、「多面的・総合的に考える力」「他者と協力する態度」「進んで参加する態度」の三つを特に重視し、めざす生徒像を以下のとおりとした。

ESDでめざす生徒像

「自分を大切に ひとを大切に 未来を大切にできる生徒」

○身のまわりの出来事を様々な側面や立場から考えることのできる生徒（Care）

○仲間と協力できる生徒（Communication）

○地域の一員として進んで参加できる生徒（Action）

2 実践内容

(1)総合的な学習の時間を軸とした各教科との関連付けによるカリキュラムの再構築（ESDカレンダーの作成）

ESDを進めるにあたっては、新しい取組を一から進めるのではなく、3年間の総合的な学習の時間の指導計画を見直すことから始めた。総合的な学習の時間を軸に、教科横断的にどのように系統立てて実践するか把握できるよう、各教科等の学習内容を8つのカテゴリーに分類した。さらに総合的な学習の時間の学習内容と関連している単元を整理し、ESDの視点や身に付けさせたい3つの能力・態度に絡めた単元目標を作成した。

ESDカレンダーを作成することで、学校全体の学習活動を可視化し、各教科等との関連性を明示できた。またどの学年がどの時期に何を学習して

いるかを横断的に知ることにより、他教科と連携した取組も可能となった。それらに加え、複数教科が同時期にESDに関連した内容の授業を行うことで、生徒にもESDへの関心を高めさせ、その重要性を認識させることができた。

第1学年 ESDカレンダー（一部抜粋）

ESDと関わる項目 <横…環境学習 縦…気候変動 横…世界遺産や地域の文化財等に
身につけさせたい資質・能力 <多面的、総合的に考える力…(多) 他者と協力

月	国 語	理 科	英 語	総 合
4	学習の進め方(横)	植物のくらしとなかま:花のつくりとはたらき(多)(横)		オリエンテーション(集団作り)(横)
	野原はうたう(多)			
5	花のりの向こう(多)(横)	植物のくらしとなかま:根と葉とほのつくりとはたらき(多)(横)	Program 5:アメリカからの転校生(多)(横)	校外学習(くろんぐ園のふし作り)(多)
	漢字(漢字の組み立てと部首)(多)		Program 5:ワールド先生がやってきん(多)(横)	
6	ダイコンは大きな根(多)		Program 6:リサイクル活動(多)(多)	
	ちよっと立ち止まってみよう(多)	植物のくらしとなかま:植物のなかま(多)(横)		SDGsオリエンテーション(多)(横)
7	話の世界(多)		Power-Up Reading: 英語の掲示・読書(多)	
		身のまわりの物質:いろいろな物質とその性質(多)(横)	Program 6:国際フードフェスティバル(多)(多)	世界で取り組まれているSDGsを調べよう(多)(多)(横)
	空を見上げて(多)			

(2)総合的な学習の時間における探究的な学びと生徒の主体的な活動の実践（SDGs17との関連）

第一学年

「Neyagawa Action Plan~私たちだからできるSDGs」(SDGs11)

1年生ではまず「ESDとはどういうものなのか」を考えることから始め、ESD QUESTを読み、世界では様々な問題が起こっていること、またそれを解決するための取組がESDであることを学んだ。続いて「世界で行われているSDGsを調べよう」というテーマで、タブレット、新聞、図書館の本などを用いて、世界が抱えている課題とそれに関連するSDGsを調べ、ポスターセッションで発表を行った。事前にループリックの評価基準を伝え、伝わりやすい発表にするにはどうすべきかを考えさせた。

続いて実際に寝屋川市でもできるSDGsへのアクションプランについて考えさせた。SDGsを通して自分たちの住む寝屋川市をより深く知ることを目的としたが、これまで学んできた世界の国々や日本の他の地域と比べ、寝屋川市の良いところや改善点を考える地域学習となり、今まで知らなかった寝屋川市の取組にも関心を持つことができた。

班ごとにアクションプランを練り、そのプレゼンテーションの準備を進めつつ、Think the Earth 理事の方から「SDGs for School ~未来をつくる人

になろう」というテーマでご講演いただき、生徒は自分たちの提案を具現化するには何が足りないのかを再検討した。

研究発表会の当日には地域の方々をお迎えし、各班のアクションプランを発表し、意見交流を行った。ごみの捨て方の工夫や節電などの提案に、地域の方からも具体的なアドバイスをいただいた。

この経験をもとに、学年としてESDAYを設け、実際に行動を起こすことを決め、三学期には班ごとに校区清掃を行い、ごみマップを作成した。



また、ESDソングの創作にも取り組んだ。今までのESDの学習から学んだことなどを生徒が出し合い、作成委員会がそれらを詩としてつなげ、完成した歌詞に音楽科がメロディを加え、41期生オリジナル「ESD SONG2018」を完成させ、学習発表会にて披露した。

第二学年

「地域の魅力を発信しよう2018」(SDGs 8.11)
1年時の「100年後もより住みやすい寝屋川へ2017」の取組に続き、2年時ではActionにより力を入れた活動を進めた。

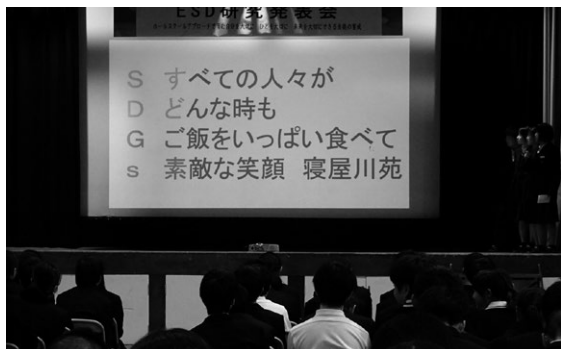
6月に実施する3日間の職業体験学習を1学期の活動の中心と位置づけ、職業体験実施後は、お世話になった61か所の事業所ごとに分かれ、体験した内容を紹介するポスターを作成し発表した。さらに身近な地域の飲食店や販売店、福祉施設など16か所の事業所を選び、その事業所の魅力について各班が独自の方法でPRする活動を企画した。

この活動には、2点のESDの視点を盛り込んだ。1点目は「多面的・総合的に考える力」を深めることをめざした事業所の魅力をPRするためのイン

タビュー活動である。働く地域の人々の生の声を聴くことで、生徒が既存の知識をさらに深めたり、新たな情報を受けとめ異なる角度から考えたりすることを目的とした。生徒たちは質問を事前に準備し、より興味を引くPRにするため、事業所での写真や動画の撮影にも凝るなど工夫する様子が見られた。



2点目には、PRについては、SDGs17項目のどれかひとつをテーマとして意識させたことである。例えば、地域の家具店をPRする班では、東南アジアの一本の木を主人公に、木が切りだされ加工され、地域の家具店に並び、家庭で大切にされるまでを寸劇で表現した。家具を1つ販売する際に1本植林活動している企業の社会貢献活動などインタビュー時に得た情報をもとに、SDGs15「陸の豊かさを守ろう」をテーマにしていた。生徒にとって身近な地域の事業所や店舗などが、将来の環境のことを配慮し、世界とつながっていることに気付くことができた。



研究発表会当日、全16か所の事業所のPR発表を体育館で実施し、相互評価を行い、代表班を決定した。この発表には各事業所や中小企業をPRする会社（株）PRリンク代表の方にも来ていただき、

生徒の発表に対してご意見をいただいた。さらに学習発表会では、5つの班の発表を教科の切り口から一日の授業の流れとして発表した。

また、美術科の指導のもと全員で、5万本の爪楊枝を使ったSDGsのモニュメントを作成し、体育館に掲示したが、見る人の目を奪うものであった。

第三学年

「WASABI de ESD」（SDGs11.15.16）

第三学年では、1年時には「寝屋川を再発見」、2年時には「地域の職業、人、学校に学ぶ」として人との関わりを大切にした学習を行ってきた。3年時には、視野を寝屋川や大阪以外の地域に広げ、長野県への修学旅行を通して、生徒たちがグローバルに考えローカルに活動を行うグローバルなESDアクションに取り組んだ。

修学旅行では、太平洋戦争中に作られた松代大本営を訪れ、語り部の方から当時について学んだ。また、自然の雄大さや素晴らしさを体験し、わさび農園を訪れたことで、長野の特産品であるわさびについても興味を深めた。

帰校後は、家庭科での幼児教育の分野と組み合わせ、学んだことを地域の幼い子どもたちに伝えようと絵本作りに取り組んだ。ESDの視点を大切に制作に取り組み、完成した絵本は学年で交流しあった。



夏休みには探究的な活動として、わさびについて自由に研究を深めた。2学期には、わさびと英語科、保健体育科、社会科、家庭科、理科を繋げ、各教科の切り口からわさびを見直す学習も行った。

研究発表会当日は、「WASABI DE ESD」というテーマで、わさびの魅力をアピールし、わさびの未来を明るくものにしようと、学年教員がゲーム形式の活動を考案した。これは寝屋川市役所が行ったワークショップ「若者会議」に着目し、企画政策課から、「SIMねやがわ」の手法についてレクチャーを受けたことから実現した。

生徒を農家・卸売・小売・消費者の4人グループに分け、農家－卸売り、卸売り－小売り、小売り－消費者間で模擬売買を行うもので、活動を通して流通に係る諸経費等コストとの関係にも気づき、商品を捨てざるを得なかった経験から食品ロスを減らすために自らできることについて考えることもできた。また、商品を売り込むことを通して、地域の魅力をアピールする方法も考えさせた。



このような活動を通して、わさびに限らず地場産業のものや商品を広く販売していくことは大切なことであり、自分の地域を再発見しアピールすることで地域の力を高めていくことにつながるということにも気づくことができた。これらの学習の積み重ねにより、生徒たちの多面的・多角的なものの見方や考え方、仲間と協力し、自ら与えられた責任を進んで果たす力を高めることができ、寝屋川の未来を考えるヒントにもなった。

学習発表会では、これらの学びを実行委員会が教科ごとのテーマに分けたシナリオに仕上げ、全員で主体的にESDの学年劇を披露した。

学習発表会後には、全学年で3つの能力・態度

に着目したアンケートを取り、考察を行った。1年生では顕著な伸びは見られなかったが、2・3年生では、「多角的・総合的に考える力」が大きく伸びた。グループ活動に多く取り組む中で、様々な立場で考えたり、互いの意見をまとめたりする活動が多かったことによると考えられる。

生徒会におけるESD活動

生徒会執行部では、率先して啓発活動を行った。ESDについて「世界と自分を繋げよう」というスローガンを掲げ、各委員会の委員長を集めた委員長会議を開催し、委員会ごとにどのようなESD活動ができるのかを話し合った。各委員会では独自の活動を生み出していった。その一部を紹介する。

保健委員会

SDGs12「つくる責任 つかう責任」を意識し、残飯を減らすという目標に沿って、残飯調査を実施した。食の大切さについて考えさせることで、一人ひとりの食に関する興味関心を高めることを目的としている。この活動は給食が導入された当初から行っており、長年の取組の成果もあり、昨年度の残飯調査実施時には、2年生の残飯率2.3%、3年生の残飯率3.5%、学校全体では5.3%とかなり減少した。しかし、残飯調査以外の時にはまだ給食が多く残されている現状を踏まえ、日頃から好き嫌いせず食べるように呼びかけを行うと共に、今年度から抜き打ち残飯調査を実施している。

生活委員会

SDGs7「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」に沿って、少しでも消費するエネルギーを減らすために、クラスメイトに教室を早く退出するよう呼びかけ、全員退出後、消灯しエアコンを切って戸締りをする。教室の鍵の返却までの時間が大幅に短縮できたことにより、無駄な消費電力を削減することができた。

美化委員会

SDGs11「住み続けられるまちづくりを」をテーマに、校内のごみを少しでも減らし、再利用できるものを分別することを呼びかけている。教室にはリサイクルボックスを設置し、リサイクルできる紙ごみが増えた。また、校内のごみで「ごみアー

ト」を制作し展示した。

地域とともにESD

毎月地域の方々とともに高校生、中学生が校区の小学校の校門で登校する小学生にあいさつをしながら見守る「SGSあいさつ運動」、校区の高齢者のお誕生月に、ボランティアの生徒がバースデーカードを届ける「ハートフルプレゼンター」、地域ボランティアの方々が見守る中、中学生が小学生を引率し、各所でゲームをしながら最後に農園で芋ほりを行う「ウォークラリー」、校区の「鉢かづきフェスタ」などもESDの取組として位置付け、地域の方々とともにSDGsを意識してパートナーシップを大切に、住み続けられるまちづくりをめざして行っている。

3 成果と課題

検証改善サイクル実施のため、国研が示す9項目に、「(地域の) どのような活動があれば参加したいか。」「地域をより良くするために何ができるか。」という項目を加えて学期初めと学期末に意識調査を実施した。その結果「地域の活動があれば参加したい」と考える生徒が大幅に増加した。(1年29%→61%、2年36%→63%、3年50%→83%)地域に目を向けた取組を行った成果であると考えられる。また、今年度の全国学力学習状況調査における「地域や社会で起こっている問題に関心がある」についての肯定的評価が60.6% (全国59.3%)となり、昨年度よりも26.8Pも伸びた。また、三つの能力・態度については、「身の回りの出来事を様々な側面や立場から考えている」について2年間で67%から80%と伸び、成果が見られた。

課題としては、総合的な学習の時間について、ルーブリック評価に関する認識は進んだが、生徒の学習の足跡を残し評価に生かすポートフォリオ評価への取組について学年間のばらつきが見られたことが挙げられる。

来年度は修学旅行先を長崎方面に変更する。ESDの視点を大切にしたい取組をさらに深め、よりグローバルな視野で物事を考え、世界に発信できる生徒の育成に努めたい。

高等学校賞

和歌山県立田辺高等学校
教諭 和田 充可

“Think Locally, Act Globally”

～郷土に愛着と誇りを持った、グローバル人材の育成にむけて～

1 はじめに

本校は和歌山県南部の田辺市に位置する創立123年(2018年度)の伝統校で、1学年8クラス(普通科6クラス、併設中学校より内部進学 of 自然科学科2クラス)を設置している。また本校のある田辺市は、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録されている熊野古道などがあり世界中から観光客が訪れるなど、地元にながら世界を感じることのできる地である。

2 学校全体での取組

(1)ユネスコスクール加盟(2017)まで

2014年度に文部科学省からスーパーグローバルハイスクール(SGH)のアソシエイト校に認定されたが、申請段階から「グローバル人材とは何か」を議論し続けてきた。この中から、グローバル人材に育つ条件として「ローカル=地元」に目を向け、郷土への愛着と誇りを持った人が、世界市民の一員としてグローバルに活躍できる人材になると考え、「温郷知新^{*1}」「Think Locally, Act Globally^{*2}」をテーマに活動を開始した。

ESDを担う分掌(推進室)を設置し、総合的な学習の時間を中心に、情報科や家庭科の授業と内容を連携させながら、さらに他教科でもESDを意識した授業づくりを推進している。本校では特にフィールドワークとプレゼンテーションを繰り返し実施することにより、地元を知ることはもちろん、自ら主体的に行動し、俯瞰的・複眼的視点で物事を分析・考察を行い、自らの言葉で論理的に語り提言することを目標としている。

ユネスコ世界遺産を持つ地域であることもあり、ESDを意識した教育計画の中からユネスコスクールの理念と合致し2015年に申請、2017年度に加盟となった。

^{*1}温郷知新とは「ふるさとをたずね、あたらしきをしる」という意の本校の造語

^{*2}“Think Locally, Act Globally”とは、広く使われている言葉(Think Globally, Act Locally)をあえて逆にし、地元に関した活動から経験をj得て、地元に関脚した世界に通用する人を育てるという願いで使用している。

(2)郷土に愛着と誇りを

本校は9割以上が大学に進学するが、電車で2時間圏内に大学がないことから必然的に地元を離れ県外に出ることになる。県外に出た卒業生からは、全国各地から集まった人の中で「地元のことを語ることができず恥ずかしかった」など話は以前からよく聞いていた。

このことから新入生にアンケートを継続的に実施している。毎年8割以上が地元に関着を持っているが、地元のことをよく知らない結果である。地元を語る言葉を持たず「何の特徴もないただの田舎」という漠然とした認識を抱えたまま地元を離れることが多く「地元に関着はあるが、地元に関自信を持てない、語ることのできない」状況である。高校卒業までに地元を知り地元に関誇りを持った「心の芯」のある人になって世界に打って出て欲しいとの願ひから2014年度より地元に関飛び出して複数のプロジェクト学習を本格化させている。

(3)ねらい、身につけたい能力や態度

①ねらい：郷土への愛着と誇りを高め、異なる文化や価値観を持つ集団の中で認められる日本人としてのアイデンティティを確立し、持続可能な社会づくりに取り組む態度を育む。

②身につけたい能力や態度

i) 気づきの力、気にとめておく態度：普段の生

活で見過ごしがちなことなどに気づき、気にとめておくことが様々なヒントや予想外のつながりになっていくこと。(無関心でないこと)

ii) 仮説を立てる力と勇気：目標もなく調査を行うのではなく、活動の目当てのための仮説を立てること。また容易に想定される無難な仮説ではなく、大胆な仮説を立てることができる勇気。

iii) 巻き込み力、対話力、交渉力、積極性：探究活動の中では、市役所や地元企業や商店などの協力や協働が不可欠になる。生徒自らが積極的に行動し求めなければ活動が進展しないので、もがき苦しみながらも身につけていくことになる。

iv) 協働(コラボレーション・パートナーシップ)：グループでの仮説設定や調査、そして発表や企画の実行の場合、または地域との連携の場合には不可欠な力。

(4)地元自慢プレゼン



入学後にまず個人単位で「地元の魅力発見」をテーマにフィールドワークとプレゼンテーションを行っている。3ヶ月間かけて、地元についてインターネットには掲載されていない、人に知って欲しい地元ネタを調査し、あえて手書きでの紙芝居プレゼン法(KP法)にて全身で発表する(原稿を見ずにTEDを意識)。当初は生徒の自分の興味関心のあることでも「3分も発表できない」という不平に満ちた雰囲気である。基礎調査はインターネットで行うこともあるが、後は聞き取りなど直接足を運び取材を行わせる。最終的に苦勞をして

調査した分、生徒は「3分では足りない」と逆の不平を漏らすほどで、3分におさめようと工夫を凝らした活発で充実した発表になる。調査の手法を学ぶと同時に、生徒それぞれの地元の魅力を相互に知ることができ、調べて発表する楽しさや、地元への理解を進め、やりがいを通して課題探究へ向けてのモチベーションを高める効果もある。

(5)グループでの取組

「直面する課題解決にむけて」「地元の強みを活かすには」を大テーマにグループ単位で課題発見・課題解決型の探究活動・課題研究に取り組む。「グループの誰かが」ではなく「グループ全員で」を常に意識させ、KJ法を用いて全員が意見を出し仮説を設定し、田辺市をはじめ地元の様々な組織・企業・商店などの協力と支援のもとフィールドワークを実施している。

最終のプレゼンテーションでグループ全員が提案・提言ができることを目標に取り組ませている。「模造紙手書き2枚・客観的なデータを入れること」の緩い縛りではあるが、7分間の中に文字通りありとあらゆる工夫(商品開発デモ、聞き手をも参加させたコント形式など)をこらしている。発表を理解してもらおうと努力し、最終のポスターセッションでは、調査に協力いただいた地域の方にも開放して成果発表・提言を行っている。



(6)姉妹校との交流

アメリカの姉妹校の受け入れや派遣に合わせ、相互に地元の魅力を相手の言語でプレゼンテーションを行う取組を行っている。(*来校生徒は主

に日本語クラス生徒が中心) お互いに相手の言語で戸惑いの中、シンプルでストレートな表現でもジェスチャーなども取り入れることで意外と意思疎通ができ、発表を通し大いに盛り上がることで、国際交流は言葉だけではないことを体現している。一見、互いの発表内容が地元のことでつながりなさそうで共通したことが見つかったり、地元を誇りに持った発表が楽しいと実感できたり、国境を越えても思いが同じであったりと、世界市民の一員としての自分を感じる瞬間でもある。

3年生では、これまでの地元に関り添った活動をバックグラウンドとして、「地元に立脚し世界市民の一員としての自分 = “Think Locally, Act Globally”」をテーマに、多文化共生社会の実現を軸に日本や世界の諸課題について考察させ、プレゼンテーションや小論文作成などの活動を行っている。



3 生徒の取組への態度

入学時のアンケートでは、地元を知らないことはもとより、自己に自信を持っていないなどの自己肯定感が低い生徒が想像より多いことがわかり、地域学習を通して対応することも取組の狙いとされた。またデジタルネイティブの世代で、中学校でインターネットやパワーポイントなどの扱いを修得していることから、従来はインターネットの記事をそのまま貼り付け、見た目のアニメーションやページ遷移の効果ばかりに注力し、内容の薄いもので、画面の文字をそのまま読むように淡々と発表をこなしているものが多かった。

このことから、パソコンやパワーポイントを使わずに、あえて紙と手書きでの発表を指示し、教科、班、クラス、学年など様々な規模で、紙芝居プレゼン法やポスターセッションなど形式も変えなが

ら繰り返し人前で発表することを習慣化しようとしている。インターネット上でも基礎調査は行いが、ネット上にない情報を収集することを義務づけている。特に総合的な学習の時間では、入学後すぐに3ヶ月間の時間をかけ、フィールドワークを行い、まとめ、自らの言葉でアナログな方法(KP法)で発表するプロセスを経ることで、唯一無二の発表となり自信につながっている。ポスターセッションではフィールドワークの関係者に来て頂くことで、発表に責任が持て同時に提案・提言などを聞いてもらい、自らが地元の役に立っているという自己肯定感の醸成にもつながっている。

また、取組を通じて見えてきた生徒の特徴として、「大人と話す機会のない」ことがある。フィールドワークに出る際には、必ず日時などのアポイントメントを電話で取るが、電話のかけ方が分からないのはもとより、マニュアルを用意しても生徒は大苦戦する。上手く自分のことを伝えることができないためフィールドワークに出ても訪問先の大人から逆に質問を引き出してもらうことも度々である。成長の過程で親や「先生」と名前のつく以外の人との会話が少なければ、近所など地元の人と話す機会が少なくなるので、地元のことを知る機会が少ないのも当然である。地元の人々から暖かい言葉と期待をかけていただくことで、取組を通じて地元に対する見方は大きく変わる。



多くの取組で、はじめは自信がなく「自分だけが突出したらやばい」と感じ、周りの様子をうかがい動き出しが常に遅いが、発表では教員の予想以上の活発な発表となる。しっかりとした内容を持つことで自信と伝えたい気持ちが前面に出て、聞く側にも熱意が伝わり新たなことを知ろうとする前向きな雰囲気に満ちた発表になる。これを繰り返すことで発表への抵抗感が薄らぎ、教科学習でのグループ学習や発表などにも好影響を与えている。

4 生徒有志による「SEEKER」の活動 ～多文化共生社会の実現にむけて～

(1)SEEKERの設置

学校全体の取組を行う過程で、生徒有志から「地元のことをより深く知り考えたい」、「地元を通じた国際交流をしたい」という意見が多く寄せられ、生徒主体で地元の探究活動を実施する「SEEKER^{*3*4}」が組織された。活動を進めていく上で、「Think Locally, Act Globally」を活動指針として、各地域のユネスコスクールやユネスコ部の活動を参考にして精力的な活動を行っている。

^{*3}SEEKER「探求者」は、生徒がそれぞれの頭文字を考えた。＝「Suggestion（提案）」「Explosion（調査、実地踏査）」「Exaltation（高めること）」「K→Cooperation（協力）」「Education（教育）」「Revitalization（再生、復興）」

^{*4}校内での位置づけは、クラブではなく生徒会と同じような委員会組織。（本校では新規クラブ認定に最低3年かかる理由から分掌直轄）

(2)活動内容

当初から世界遺産の熊野古道を訪れる外国人観光客（インバウンド）に焦点を当て、実際に熊野古道を歩きその中で外国人観光客や地元の人にインタビューなどを継続的にを行っている。活動の中では田辺市や観光協会と連携して外国人観光客に対するアンケートなども実施している。同時に保全に向けた活動として、熊野古道を整備する道普請を、花王をはじめとする民間企業と協働で実施している。



また世界にも目も向け、OECDからの援助を得た活動（OECDイノベーションスクール2030）ともリンクし、熊野古道の観光客に対する調査と同

時に、カナダ・オンタリオ州（世界遺産：ナイアガラ滝）、ドイツ・コンスタンツ（世界遺産：ライヒェナウ島）の高校を訪問し、世界遺産に対する地元の意識や保全について熊野古道との比較などのフィールドワークも実施している。



(3)「T-Café」イベントの企画・実施

外国人観光客を対象とした活動や調査の中から、国内に定住している外国出身の観光客が一定数あることが分かり、さらに調査を進めると田辺市とその周辺も予想以上に外国籍の定住者や居住者が多いことがわかった。しかし行政の方でも数だけの把握で、外国人どうしのつながりなどの実態については把握できていなかった。

このような経緯から、本校生徒が企画運営を担う形で、平成29年6月に交流イベント「T-Café ～TanabeでTomodachiをTsukuro～」を田辺市生涯学習課、国際交流センターとともに開催した。



多文化共生社会の実現に向けて、高校生が地元に住む外国人と地元住民を結ぶ架け橋となり、同時に外国人同士のコミュニティづくりのきっかけとなることを意図してのものであった。小中学校のFLT（ALT）にも協力していただき呼びかけ

を行い、出身国を問わず、子供から年配の方まで幅広い層の参加者があった。

午前は地元の食材を使った梅ハンバーガーやみかんケーキ作りの協働作業、午後は文化などについて質問ビンゴや、協働ゲームなどを通しての相互理解などで、大変盛り上がり成功をおさめた。

うれしい誤算であったのが、地元からも外国籍方からも子供が参加してくれたことである。子供の参加を想定していなかったが、当日親と一緒に来たことから、子供の素朴で素直な行動や発言が開始当初のよそよそしい雰囲気を吹き飛ばし、子供の話題や行動を起点として世代や国籍を超えたコミュニケーションの形成に大きく貢献した。

2回目となった今年度は、世代を超えて楽しめるT-Caféとして、調理体験に加え、クラフトやダンスなどのイベントも加え、田辺の広報や教育委員会にも告知いただき、多文化共生社会を軸とした市民の交流イベントとしての性格も持つようになり、交流の輪が広がってきている。来年度は防災T-Caféとして、防災まちづくり課や市消防本部などにも協力いただき、外国人定住者が不安に思う、地震・津波対策、防災・減災対策についての防災訓練ワークショップも企画している。



5 成果と課題

地元を知ることから始まった活動が発展し、地域課題研究などから人口減少、少子高齢化、乱開発などの持続可能な社会づくりを阻害する課題を改めて認識することになった。それらの解決ために視点を換え地元の魅力や課題について、KJ法や実際のフィールドワークを通して徹底的にピックアップさせることで課題解決の糸口につながるが見え、外国人を含めた交流人口の増大をテーマに取り組み始めた。観光客と地元住民の相互が

持続可能な関係になることを具体化することが課題である。

本校の取組が地元で認知され受け入れられるにつれて、地元からの様々な要望や協働依頼が相次いでいる。特に在留外国人との多文化共生社会の実現にむけた「T-Café」のイベントは反響が大きく、事業の継続のために地元団体から資金的支援なども受けることにもなった。多文化共生社会の実現に向けてのモデルケースとなるべく、生徒とともに長期的な視点に立った継続性や発展性も計画に入れ実行していきたい。

一方で総合的な学習の時間や有志による課外活動（SEEKER）に対して、地域からの要望や依頼が急増し対応が間に合っていないのが現状である。依頼内容も玉石混淆でありESDやSDGsの視点や観点として協働に資するものであるかを、生徒とともに取捨選択や切り分けを迫られる事態となっている点が最大の課題である。また、取組の歴史が浅く教員や生徒が入れ替わっていく中で、惰性ではなく常に発展性を持った前向きな活動を継続していく仕組みづくりも課題である。当初の予定になかった多文化共生社会の実現のように、生徒の柔軟な発想と実行力によって、持続可能な社会づくりに貢献できる新たな知を創造し発信していきたい。



田辺市広報2018年8月号より

ベスト・アクティビティ賞

三重中学校・高等学校
教頭 関 八州雄

地域の偉人「松浦武四郎」に学ぶ持続可能な社会

～様々な人々が共生する社会と持続可能な産業のありかた～

1 はじめに

本校は中高一貫六年制の私立学校であるが、松阪市という地方都市にあり通学する生徒の大部分が市内出身である。松阪市は伊勢参宮街道の途中にある豊かな文化を持つ商業都市で、国学者本居宣長や後に財閥の祖となる豪商三井高利など様々な人物を輩出している。今回学習した「松浦武四郎」もそのうちの一人であり、今年が生誕200年ということで市は記念事業を通じて武四郎の功績を顕かにしていこうとしていて、本校生徒が「松浦武四郎」に関して学習することで事業に参加しませんかとお誘いをいただき今回の取組を計画した。

2 ねらい

松浦武四郎の功績で特記すべきことは、幕末に蝦夷地を探索し、アイヌの人々と深い交流を持って北海道の名付け親となったことである。市から誘っていただいたときに、今回の事業のテーマが「武四郎の道は未来へとつづく」であり、武四郎の生き方、考え方がESDそのものであると考えているという説明をもらった。そこで我々は事業のテーマにつながるように学習を進めることとし、まず武四郎がアイヌの人たちを守るために行動したことから異文化の理解と他者との共生という視点で学習を進めることを一つの柱とした。さらに地域の未来を考えようということで、三重県の指定伝統工芸品になっている松阪木綿について考えていくことにした。武四郎が批判した開拓のやり方は言ってみれば人と環境から搾取するようなやり方である。人にも環境にも優しい形で産業を発展させるためにはどうしたらよいか考えることをもう一つの柱とした。

3 活動の概要（末尾資料）

計画案にあるとおり、松阪市の実施する記念事業を軸として、そのスケジュールにあった学習と、従来から実施していた授業や行事の内容を見直して先に示したねらいに結びつくよう、教科横断的に持続可能な社会を考えられるように編成した。ただし計画では年次進行することになっているが、今年度はすべての学年で同時に実施したために3年生では学習の順序が前後したり、授業に組み込まれた学習ができない学年も出てきたりしてしまった。

4 実践の具体例

(1)武四郎まつり

まず手始めに、松浦武四郎に興味を持ってもらうために有志を募って武四郎まつりに参加した。これは松浦武四郎記念館で行われる23回目を迎える行事で、記念館が無料開放されて展示を見学できるほか、今年は生誕200年ということで、市が整備した武四郎誕生地の公開やアイヌの古式舞踊などアイヌ文化を体験できるイベントである。生徒は知識はあるが、アイヌの人たちと会うのは初めてであり、アイヌの踊りを興味深く見ていて、またアイヌの衣装を着たりして楽しんでいた。



武四郎まつりのアイヌの踊り

(2)松浦武四郎講演会

松浦武四郎記念館の主任学芸員の山本命さんをお願いして、1年生から3年生まで全学年を相手に講演してもらうことにした。武四郎に関する学習に関して柱は決まっていたが、内容に関しては特に注文せずに自由に講演していただいた。内容は今後の学習につながることで生徒も興味を持って聞いていた。講演後にアンケートをとったが、松阪市の広報活動の結果か、ほとんどの生徒が武四郎について知識を持っていた。



講演会の様子

(3)「小さな労働者」東京書籍版

従来は読書のすすめのような扱いで簡単にすませていたが、安価な労働力として木綿畑や紡績工場などで働かされる子どもたちの人権について学習した。労働の過酷さを少しでも実感できるように木綿の栽培、収穫や糸紡ぎを目指したが、後に述べるようにあまりうまくいかなかった。ただ次項で述べる就労支援施設訪問とあわせて、人権に関する問題のさまざまな姿を生徒は気づいたように思う。

(4)松阪市就労支援施設「向野園」見学

この施設は学校に隣接し生活介護、就労支援の事業を行っている。毎年、三重中高の体育祭では利用者にも参加してもらい交流している。また生産活動事業として菓子工房でパン、お菓子作りなどをしていて、毎週木曜日に学校で販売してもらっている。施設内での職員、利用者の仕事の様子、自分たちが食べるパンがどのように作られているかを見学し、また実際に利用者と同じ仕事を体験

した。プラスチック容器のふたのゴムをはめていく仕事は機械でしていると思っていた生徒もいたようで、自分たちが気づかないところでさまざまな人たちの恩恵を受けていることを認識していた。



作業を体験する生徒の様子

(5)公民科「人権と共生社会」

国語では子どもの人権について考え、向野園では介護や就労などの支援が必要な人たちと接することで、人権やさまざまな人たちとの共生について意識できるようになってきたので、特別な内容ではなく普通に授業をすすめた。

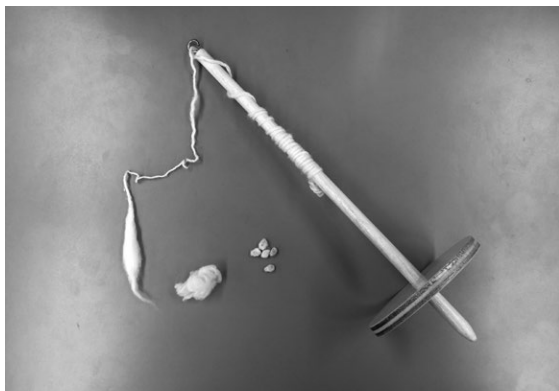
(6)木綿の栽培・収穫・糸作り

まず木綿の栽培から始めた。1年生4クラスでプランター2つずつ、計8個に種をまき、水の当番を決めた。またバックアップとして自宅の畑にも数株育てることにした。心配したのは休日の水管理をどうするかだったが、生育初期は乾燥気味でよいとのことだったので休日前に日陰に移した。夏休み期間中の水管理は、公立中学校と違い生徒の通学範囲も広いことから毎日面倒を見ることができず、休み中も生育を観察してほしかったが、自宅に持ち帰ることになった。ただ栽培方法が悪かったのか結局プランターの木綿は花は咲いたが実がつかなかった。バックアップの株だけが実をつけ、それが膨らんではじけて申し訳程度の綿がとれた。生徒にはこの様子を見てほしかったが残念であった。どのように収穫するかも体験できなかった。これは中2の国語で習う「小さな労働者」の中で、子供たちに強いる過酷な労働の例として出てくるからであるが、収穫できたわずかばかり

の綿を見せて説明するしかなかった。糸作りは、木製のスピンドルを使い生徒の前で実演してから紡がせたのだが、なかなかうまく長い糸にできなかった。ただ糸を作る綿の繊維はもともと短いこと、それに撚りをかけて繊維を引き出して糸にしていくということは理解してもらえた。後の紡績機械の見学につなげることと、「小さな労働者」の中に出てくる「スピナー」という職業の少女の労働の大変さを理解するための体験である。



栽培中の木綿



スピンドルと収穫した綿・種

(7)木綿機織り体験

松阪もめん手織りセンターで機織り体験をした。ペダルで縦糸を上下させて、その間にシャトルを通して横糸を入れていくのだが、なかなかきれいに織れずにワイワイと楽しそうに体験していた。松阪木綿の特徴である縞模様の作り方と機織り機械のしくみを理解させ、トヨタ産業記念博物館の機械の見学につなげるようにした。自分で織った布は持ち帰れるため生徒は充実した体験ができたと思うが、難点は15cm四方の布を織るのに40分く

らいかかるのと機械の数が限られていることである。



機織り体験

(8)トヨタ産業記念博物館見学

ここでは糸を紡ぐ機械や布を織る機械が、手動だった時代から徐々に作業が自動化され、動力を用いて人間がほとんど関わらなくてもよくなっていく変遷の過程が見られる。手織り体験で苦労したシャトルを通す作業も、ペダルの操作だけで自動で行ってくれる改良から、ついにはシャトル自体をなくして水で横糸をとばす進化を目にして、人間の工夫と技術の進歩の大きさに驚いていた。



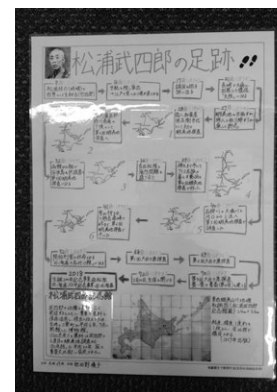
トヨタ産業記念博物館見学の様子

(9)学園祭の夏休み宿題展示

中1と中3全員に夏休みの宿題として、松浦武四郎やアイヌ、松阪木綿などについて調べたことをレポート提出させて、学園祭で展示した。内容的に深まっているものはあまりなかったが、発表を行うメンバーの研究を聞くための基礎的な知識は全員が持てたように思う。



レポート展示



レポート例

(10)発表のための調査、研究

学園祭と松阪市主催の武四郎フォーラムで発表するメンバーによる研究はかなり難航した。武四郎の生き方から他者との共生を考える学習は、なぜ武四郎が異文化であるアイヌを理解し敬意を持てたかを武四郎の体験等を調べることでまとまっていたが、松阪木綿から産業の未来を考える学習は、議論していくうちに松阪の木綿産業についての評価があいまいになって方向性が定まらなかった。現在、松阪木綿を作っているのは御絲織物という会社一軒だけである。江戸時代の松阪木綿の隆盛ぶりとは比べて果たして持続発展している

といえるのかどうか、三重県の指定伝統工芸品だが、昔の機械を使用していて、その機械でないと特徴が出せなかったら、需要が拡大しても対応できるのか、今では昔を懐かしむ象徴的商品なのではないのではないかなど未来に向けた発展という姿がなかなかイメージできなかった。松阪木綿は衰退したととらえて、その反省点から産業一般の発展の要素を考えることもできないわけではなかったが、地元の伝統を守り、発展させるという方向でないとあまり意味がなくなってしまうと考えた。結局、伝統工芸品としてのすばらしさはあるが発展の方策が見つけられず、発表は他者との共生のテーマだけでいくしかなくなってしまった。生徒には難しすぎるテーマだったかもしれない。三重中学校では卒業式に松阪木綿を使った証書フォルダーを贈っているが、松阪木綿を使った商品のアイデアを考えるとところから入っていくなど具体的な点からアプローチしていくほうが簡明で方向性も出せたのではないかと反省している。



松阪木綿を使用した卒業証書フォルダー

(1)学園祭、武四郎フォーラムの発表



発表の様子

先進的な考えをもたらした武四郎の偉大さ

- ・全国各地の訪問で得た多くの知識や経験（見聞したことを野帳にメモやスケッチ）
- ・様々な人との交流で得た広い視野、客観的な目【吉田松陰、頼三樹三郎（陽明学者頼山陽の息子）箕作阮甫（蘭学者）足代弘訓（神官）など】
- ・アイヌ語を学び、直接アイヌと交流・行動（アイヌに教えてもらった地名や風俗を記録）

プレゼン用資料の一部

調べた内容は数多かったが、発表の時間が十五分程度だったので、身分制度の世の中でなぜ異民族を守るといふ先進的な発想ができたのかにテーマを絞って原稿を作成した。武四郎フォーラムには作家の高橋源一郎さんや大学教授もお見えになるとのことだったので聞くに堪える発表ができるか心配だったが、北海道大学の先生から今後への期待のことばをいただいたので生徒もよくやってくれたと思う。

5 成果と課題

松阪市の生誕200年事業のおかげで、それを軸にして従来から行ってきた授業、行事に関連を持たせることができた。生徒も授業の内容や見学の意味をとらえやすくなり理解も深まったと思う。ただ地域の産業の未来に関しては形にならず課題を残した。欲張って結論を急ぐよりは学生らしいアイデアを引出し、地域を少しでも活性化しようとする意識を育てればよかったかもしれない。グローバル化の波のようなものが田舎にも浸透して、地域の特徴、元気が吸い取られているかのような街の雰囲気もあるので、持続発展は身近なところからという気持ちで今後も取り組んでいきたいと感じている。

スタートアップ賞

神奈川県横浜市立日枝小学校
校長 住田 昌治

体験を通して生きて働く「知」を創造する学びを求めて ～SDGsを考える人ではなく、SDGsを実行する人に～

1 はじめに

本校は横浜市南区にあり、内海だった所を埋め立てた起点となる位置にある。（吉田新田）まちの中には川が流れ、繁華街が隣接している。外国につながる児童は81名、その内外国籍児童は51名に上る。この数は全校児童の約2割にあたり、その国も、中国（台湾）、韓国・朝鮮、インドネシア、タイ、バングラデシュ、フィリピン、ニカラグア、オランダ、ロシア連邦、コンゴの10か国にわたる。学校を子どもたちにとって楽しい場所にしたいという思いから、生きる力をめざす教育課程の編成に際して、子どもの生活に密着して、その思いや願いを学習に取り込むことができる学校生活を創出することを前提とし、昭和59年度より35年にわたって、現在の「生活科・総合的な学習の時間」を核とする望ましい教育課程のあり方の研究と実践を重ねている。

平成28年度からは、横浜ESDコンソーシアムのESD推進校として指定を受け、持続可能性を意識した教育活動を展開している。

今年度は学校目標である「生き生き 日枝っ子」の姿を具現化し、どのような姿を「生き生き日枝っ子」として求めていくか話し合ってきた。本校は生活科・総合的な学習の時間を重点的に研究しているが、「生き生き日枝っ子」の姿はどの時間にも存在させ、ホールスクールアプローチのビジョンとして位置付けている。研究テーマにESDを掲げて取り組んでいるわけではないが、今の研究は、学校のすべての教育活動をESDに染めていこうとする考え方である。

長年にわたって地道に取り組んできた教育活動をESDの視点で価値づけしていくことで持続可能な社会の創り手を育てていることを自覚していく。地域に繰り返しどっぷり関わりながら、子どもに



大岡川 川の様子を観察する子ども達



川の中には、自転車が！

寄り添って作られる様々な材の単元は、教科学習の内容と関連してきたり、SDGs、環境教育、キャリア教育、伝統文化、地域活性化等と関連してきたりしている。すべての教育活動が、正に、未来を創る教育のテーマとなっている。今回は、特に4年生の活動を取り上げて紹介したいと思う。

地域の偉人「松浦武四郎」にまなぶ取り組み 実践計画案（○印は従来からの授業・課題・行事など）

- 中1（5月末播種）「木綿を育てて糸を作ろう」 →○（夏休み社会宿題）「身近な地域の調査」 →（10月末）「木綿の収穫・糸紡ぎ、撚り」
各クラスで木綿を栽培→生育観察 松阪木綿の研究（課題の一つとして） 栽培から糸作成
（リン施設肥の有無の差）環境的要素 （地域の特徴）地理的要素 （糸の性質・作成の技術）技術的要素
- 中2（5月）「木綿機織り体験」→（10月）○国語「小さな労働者」 →（12月）○「向野園」訪問 →（2月）○「トヨタ産業記念博物館」
手織り機械のしくみ・特徴理解 （東京書籍教科書） 就労支援施設で見学・交流 紡績機械等の見学
紡績産業について・子供の人權 働く人に優しい技術の変遷
- 中3（5月）○公民「人權と共生社会」 →（夏休み宿題）①「武四郎が守ろうとしたアイヌ民族」 →（9月）○学園祭中学行事で発表
武四郎から学ぶ共生社会 ○学園祭学習成果クラス展示
②「持続可能な産業とは？」
未来につなげる地域の産業・松阪木綿

松浦武四郎生誕200年記念事業として松阪市が実施する今年度の特別な行事

- 第23回武四郎まつり（H30.2.25）参加（有志） →松浦武四郎講演会（H30.3.13）全学年 →（9/1）松浦武四郎ミュージカル鑑賞（有志）
→（9/7）武四郎への手紙応募（有志） →（10.13）武四郎フォーラム in 松阪（クラギ文化ホール）での発表（代表）

2 実践内容

(1)単元の始まり

4年3組では今年度の「ともだち」（総合的な学習の時間）の時間に大岡川のごみについて学習を続けている。本校学区には二つの川（中村川と大岡川）が流れている。川があるものの、子どもたちは川で遊ぶ体験が不足し、川に親しんでいるわけではない。川を視界に入れて生活しているため、満開の桜が映る川面や、クラゲが沢山発生する川の様子、そして、埋まっている自転車などの大型ごみや、ごみが流れていく様子を見るなど、その都度姿を変える川は日常的な風景となっている。

社会科で吉田新田を学習したとき、自分たちが住む学区が昔は新田だったことが分かり、近所を流れる大岡川が実は入り海だったことを子ども達は学んだ。そんな中、大岡川は川とは言えけれども、本当はまだ海なのではないかといった疑問をもち始めた。それは、日々眺めている川にクラゲなどを発見し、川で見かける生き物が、海の生き物のように感じていたからである。

NPO法人「濱橋会」が主催する、川に自作の鯉のぼりを架ける企画に参加し、自分たちが作成した鯉のぼりが泳ぐ姿を見にまち探検へ出かけた。自作の鯉のぼりを探しながら、大岡川の様子を観察していくうちに、クラゲや群れになった魚、大きな魚を発見した。それと同時に川に浮いているペットボトルのごみや、レジ袋などの白いプラスチックのごみも発見した。また、それだけではなく、さびて貝殻の張り付いた自転車やタイヤ、オートバイが数台、川に埋まっている姿を発見した。生き物が生息することを確認しながら、ごみも発見した子どもたちは、生き物はごみとどうやって生活しているのか、更にそれは生き物のために幸せなことなのかという疑問とともに、生き物のためにできることはないかと考え、単元がスタートした。

(2)学習の流れ

子どもたちはまずは大岡川が川なのか海なのかについての疑問をはっきりさせたいと考えた。そこで、大岡川について詳しい、水中カメラマンであり、

NPO法人「海の森・山の森事務局」の理事長でもあるT氏に学校に来てもらい、大岡川について話を伺った。まず、大岡川は汽水域といって、山から流れる川の水と海から流れてくる海水とが入り混じった川であるという説明を受けた。また、自転車やタイヤ、生活のごみと生息する生き物はハッピーなのかどうかといった子どもたちの質問にも、たくさんの資料を用意した、T氏の見解を聞くことができた。たくさんの資料にはビニール袋を餌と間違えて食べ、死んでしまった亀の話や、T氏と共にSUP（スタンドアップパドルボード）の仲間とともに引き上げた、さび付いて貝殻の張り付いた自転車の話などがあった。そして、川のごみはまちのごみが浮遊して川に流れ込んでくるということ、川のごみは海に流れ、海の生き物を困らせているという話も聞くことができた。そこで、T氏をはじめとするNPO団体が月一回のペースで行っている、川と川周辺のごみを取る活動、PGT大作戦（ペットボトルのゴミ取っとうだいさくせん）に参加することとなった。

また学校近くで唯一川に触れあえる場所、アクアパークに入り、生き物はいるのか観察すること



になった。

アクアパークでの活動は触った水が潮の匂いがすることや、海にいるフナムシがいたり、蟹や小フグを捕まえたり、魚の群れを確認したりと汽水という川の様子と、その中で暮す生き物の存在を体感することとなった。それと同時にごみの多さを目にする事となった。



月一回のPGT大作戦に参加するとともに、自分たちも中心となってPGT大作戦をやろうということになった。そこで、T氏にも声を掛け、アクアパークに近い蒔田公園とその周りのごみを取る事となった。

子どもたちは今まで、川にごみがあるのは、誰かがボイ捨てするからだと思っていた。そのような行為をする人を目にする事もあるが、たいがいは知らず知らずのうちに、まちのゴミが川に流れ込んでたまっていくことになるのではないかと実感していく。

煙草の吸殻の多さに驚いていたある児童の振り返りカードに次のように書いていた。

「タバコが捨ててあるのははじっこもしくは草の中に良く捨ててあると感じました。子どもはタバコを吸わないので、大人が捨てているということになると思いました。なぜそのような場所にかくすもしくは捨てるのか、わたしは考えました。わたしの想像ですが、大人たちもタバコを捨ててはいけなと分かっている、はずかしいなど思っはしっこに捨てていると思いました。」

自分たちが出さない煙草のごみが沢山、それも取りにくい所に見つけた結果出た感想である。

一方で、月一回のPGT大作戦でNPO法人の大人



たちと関わったり、クラスみんなと協力したりしてごみを集めることが楽しくなり、ごみが少ないと寂しいと発言する姿も見られるようになった。これは川をきれいにしたいという表れととらえているが、子どもたちは、自分たちがごみを出す人だという認識はなかなか育っていなかった。そこでPGT大作戦で集めたごみについて詳しく分析する機会をもち、どんなものがまちに捨てられているのかについて考える話し合いを行った。

そこではプラスチックごみの分析から、自分たちの生活を振り返り、ごみが川に流れ、海まで到達することを想像することができた。T氏が前

PGT大作戦で集まったごみ (kg)				
日にち	5月19日	6月14日	7月21日	8月25日
場所	桜棧橋	桜棧橋	桜棧橋	桜棧橋
総量	51.189	22.096	39.018	52.136
ビン・缶・ペットボトル	16.98	8.34	8.72	22.14
紙ごみ	10.38	4.96	7.94	3.14
プラスチック	18.04	4.24	13.3024	15.84
吸いがら	0.849 (8490本)	1.056 (10560本)	1.157 (11570本)	0.576 (5760本)
その他	4.94	3.50	7.899	10.44

回の出前授業で、プラスチックがマイクロプラスチックになり、生き物の体に入っていくことを学んだ子どもたちは、プラスチックについてとても敏感である。

この時、子どもたちからレジ袋を使っているかいないかという話題が出た。スーパーやコンビニエンスストアに行ったとき、エコバックを持っていく家庭は意外に少ない。家にいつの間にかレジ袋が溜まっているとつぶやく子もいた。コンビニエンスストアに行ったとき、どのようなときにレジ袋を活用するのがよいのかと問いかけると、買う物が思ったより多くなったとき（手で持てないとき）や、エコバックに入りきれないときなどの返答があった。レジ袋をもらわない方法を考えるよいチャンスであった。「必ずエコバックを持っていくようにするにはどうするか。」と尋ねると、「レジ袋が高かったら、絶対もらわない。エコバックを持っていく。」「私も100円、いや500円したら絶対にももらわない。」の返答に、ほとんどの子どもが頷いた。「実質6円くらいのレジ袋に対し、500円の対価をつけるのはスーパーやコンビニエンスストアが得をするね。」と問いかけると、「何かお金を得る



方法を考えるといいよ。」と答えが返ってきた。以前のT氏の出前授業の際に聞いた、ドイツの行っている環境対策の一つで、ペットボトルを集めて箱に入れると、お金に換金できるレシートが出てくる機械があるのだが、それを作る費用にすればいいという声が上がった。そうすれば、みんなペットボトルを拾ってお金に換金するのだそうだ。

子どもたちはレジ袋やペットボトル以外では、ニュースなどから、プラスチックのストローについても興味をもち始めている。麦わらで作られたストローを見て、「本物そっくり。」との声が上がった。本物は麦わらのストローの方であることを説明したが、実感が伴わない。ただ、麦わらのストローのよさ、自然物であるから、土にかえることなどを説明した。また、ストローにできる麦わらがなかなか手に入りづらいことや、一本のストローになるまで人の手がとてもかかり、コストがプラスチックのストローよりも高くなることを伝え、と、「ストローを使わなければいい。」との声が上がった。子どもたちは現在、給食中に『ストローを使わない大作戦』を実践している。教師からは衛生面に気を付けることを指導している。子ども達から出た『ストローを使わない大作戦』の方法として、

- ・紙コップを使う → 毎日変えられて衛生的だけれど、紙のごみが増える。
- ・ストローを洗って使う → きちんと洗えないから衛生的ではない。
- ・うがいのコップを使う → 給食袋を毎日持って帰らない人にとっては衛生的ではない。
- ・牛乳パックの片方を開いて、直接飲む → うまく開けないとこぼれる。

ひとまず1週間試してみながら、いろんな方法にチャレンジしていきたいと考えている。この取組から、新しい牛乳パックのデザインを考えることにつながり、業者やテレビ局の方に囲まれる中、子ども達がプレゼンする活動へと発展した。企業も本気で牛乳パックの改善に取り組んでいくようである。子ども達の問題意識と取組が、社会を変えていく実感を得た。

3 成果と課題

この単位を通して、子どもたちに川の環境を自分事として捉えさせたいと教師は考えているが、なかなか自分事にならない。PGT大作戦をやっても、私たちではない誰かが汚すからやっている、だから、まちの人たちに川を大事にしようって伝えなければ…といった考えにつながっていく。それでいいのだろうか。子どもたちにとって川はなかなか触れることのできないものであり、目で楽しむものになっているが、アクアパークで生き物に触れることによって川を楽しむ体験ができた。まず、川を大好きにならないと川を大事に思う思いが芽生えないのではないか。上流に行って川にいる生き物と戯れ、下流との川の違いも体感した。川が楽しいものであると実感している。川を知り、川を好きになることによって、大好きな川のことをみんなに伝えたい。また、大好きな川を自分たちが大事に思う思いを伝えたい。そして、川を通じて、川を愛する多くの人々とつながり、川を大事にするために自分がやれることは何か、やってみたいことは何かについて深く考えるようになるのではないかと期待している。

子どもたちが川を大事に思う思いが基盤となり、そこに棲む生き物と共存することを考え続けられるよう支援をしたい。

第9回ESD大賞
受賞校実践集

発行日：平成31年3月17日

発行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40

Tel：03-3295-7051

Fax：03-3295-7054

E-mail：info@jp-esd.org